

西國三十三所名所圖會





西國三十三所名所圖會卷之八目錄

岡寺續

飛鳥里

遠飛鳥宮

荒墳

飛鳥坐神社

藤原第宅趾

東大谷日女神社

二階堂古趾

天磐戸

畝尾神社

甘樫神社

難波堀江

飛鳥川

板蓋宮舊趾

雷丘

飛鳥神社

藤井原

山田寺

天香山神社

湯篠

鴨車代主神社

豐浦池

廣嚴寺

飛鳥都

飛鳥寺

大國師魂神社

大原 藤原

藤原宮御井

大官大寺廢趾

塩安池

天香山

鷺西神社

味檀丘

大野丘塔古趾

飛鳥河辺行宮

真神原

大織冠社

矢釣山

興善寺

香具山離宮

法然寺

藥師寺廢趾

蝦夷第趾

田身池



石川精舎廢趾	劍池	孝元天皇陵	田中宮旧趾
大窪寺廢趾	娘子墳	久米寺	觀音堂
善無良井	芋洗川	久米神社	久米川
輕樹神社	懿德天皇陵	懿德天皇祠廟	高市神社
神武天皇陵	畝火山	畝火山口神社	住吉神社
神陵山	綏靖天皇陵	安寧天皇陵	長法寺
稻代坐神社	根成柿天神社	川股神社	雲梯森
太玉神社	賴我河原	天高市神社	宗我都比古神社
金橋宮古趾	德應寺	磐余宮	普賢寺
小綱名物荒籬	人麻呂社	美作池	蘓武川
國分寺	耳梨山	耳無川	耳無池
耳梨神社	耳梨行宮旧趾	耳梨井	常盤里
猛田原	竹田神社	用明天皇殯葬趾	芥摘妃古趾

吉備公別業古趾	甕栗宮古趾	推櫻宮古趾	市磯池古趾
磐余池	磐余野	槻大樹	土舞臺
阿部文珠堂	上宮旧趾	天皇屋敷	尊牌堂
荻田寺古趾	倉橋山	掠橋川	下居原
崇峻天皇陵	安倍神社	等弥神社	東光寺
宗像神社	跡見莊	跡見丘	忍坂山
舒明天皇陵	慈恩寺廢趾	忍坂神社	忍坂山口神社
玉烈神社	伯瀬烈城宮	追分	伯瀬朝倉宮旧趾
嚴檀本	第八番豐山長谷寺	黑崎女夫饅頭	
大藏寺	本堂	寶藏堂	
三倉寺	住吉社	不動堂	
三倉寺	住吉社	貫之梅	
三倉寺	住吉社	經堂	
三倉寺	住吉社	浴室	
三倉寺	住吉社	白鬚神社	

芭蕉墳
野馬臺詩
蓮華院
泊瀬五百槐
鷺山
苔下水
笠山
文氏墓誌

長谷山口神社
未來鐘
古河辺二本杉
泊瀬川
鍋倉山
玉葛田趾
竹林寺
磯城嶋高圓山

愛宕社
藤井坊
俊成塔
水葉宮
堀倉神社
與喜山天神
泊瀬小野
安養院
長勝寺
泊瀬山
紅葉里
家隆塔
家隆塔
文祢麻呂忌寸墓

飛鳥川



飛鳥里

橋。川原。東山。雷土ホ一隣る則ち飛鳥村より高市郡

萬葉

とよのれ飛鳥里と云ていふを飛鳥の里と云ふもあむ

續千載

飛鳥川

源氏

飛鳥川

水原畑の山中より流れて細川に合し國飛鳥四分を經る

萬葉

明日香河川余藤不去三霧乃念應過孤悲雨不有國

同

明日香川明日文時渡石走遠心者不思鴨

古今

きのつひ今日と云て明日香河がまゝなるをいふ

同

世の中何事なるも飛鳥川をわたりて六瀬より

七瀬

同所あり廣き川瀬の多きなり往昔ハテ今も何れも廣し

萬葉

明日香川七瀬之不行爾住鳥毛意有社波不立月

飛鳥都

飛鳥村に飛鳥園本宮同飛鳥宮同河原宮同河邊行宮同淨御原宮

萬葉

不止將通明日香能舊京師者山高三前後畧

山邊宿祢赤人

此歌ハ山部赤人神岳に登つて往昔より慕ひていふあり畧辭云ハすの古に都に飛鳥何原宮もあまの幸遊に淨御原の宮所と云ふは慕ふあり

飛鳥河邊行宮

其間址定まらば大和名所國會飛鳥村の南に址ありと見えれども更におはす或云行宮まゝの行宮あり其址りきなりけり

遠飛鳥宮

飛鳥村に有る今其舊址なり人皇三十三代元天皇遠飛鳥宮にて即位

板蓋宮舊址

飛鳥園二村の間より人皇三十六代皇極天皇二年四月假宮より飛鳥板蓋乃

飛鳥寺

右同村にあり今密宗にて鳥形山安居院と云ふ俗に飛鳥の大佛と云舊址は當村の北田畑の中礎石數多あり元正天皇の御宇平城より一の故に本元鳥寺と云

舊當寺一名元興寺

靈龜二年平城の左京に移りその監賜を聖

德皇太子守屋大臣

退治の御誓願より十七歳の御時建宮の所

抑人皇二十二代崇峻天皇

元年飛鳥の縫造の祖の樹葉の家を離れて寺地

此所と飛鳥の真神原

又飛鳥の苦田も言ひ同五年十月大法興寺乃

佛堂歩廊あり成る

世四代推古天皇元年正月佛舍利を柱の礎の中に納て

塔成就せり同四年伽藍造り終る

程高麗の慧慈百濟の慧聰此兩師と

りたけに任ぜむ二師に安居し

女は安居院といふ

本尊釈迦如来丈六の尊像

鞍作鳥佛師の作其初此佛像造るの事高麗

國の大興王と云聞ひて

黄金二百兩を獻せりこれ推古天皇十四年

おほが元興寺の金堂の戸より佛像たゞよりくれば納め得らん事と知れ
許多の工人おほ堂の戸よりおちあふし議ししに鞍作の鳥佛師ハ乃
勝まれば戸を壊れて安らに納め居るに衆人其工のやと感ぜしとぞ
先銘曰 推古天皇十二年歲次己巳四月八日戊辰以銅二萬二千二百斤金
七百五拾九兩敬造釈迦丈六像銅繡並狹侍等々々

其後 齋明天皇二年小須弥山の形と寺の西をかきて孟蘭盆會より日本紀に
見へり
是本朝干蘭盆會
又天武天皇六年一切経と續編りて帝ハ此寺の南門に
して二寶と禮拜より珍寶と絶へり持統天皇元年ハ天武天皇の
御衣を以て袈裟一人別二領つと絶へり日本紀又仁明帝義明十年ハ
燈油一斛正税二百束と絶へり六月十六日萬花會十月十五日下燈會
恒例とて勅修とてその宣下と給ひ續日本紀唯是佛法最初の寺おれば
貞觀四年の官符小書せしこと詞曰
此寺佛法元興之場聖教最初之地也去和銅三年帝都遷平城之

日諸寺隨移件寺獨留朝廷更造新寺備其不移阿所謂本元興寺
是也格

往昔四方の門毎に額あり東門ハ飛鳥寺西門ハ法興寺南門ハ元興

寺北門に法滿寺法滿寺今飛鳥村より一向宗の道場あり

安居井惠慈惠聰の兩師安居の時此井を穿りて故に斯く名をけり今大佛の聖二子
田圃の傍より俗にカナ水といふ是を以て俗に諸病を治すと言ふ

續後武部卿久明親王

攝河次郎うのせはら

然る人皇五十八代光孝天皇仁和二年十二月晦日冬上ハ其後再管有るも

又衰破して漸く其舊趾のありと存金銅丈六の釈迦の像今存は是日本
大佛のとも也ト云

真神京 又飛鳥の宮田ハ此よりあり

萬葉 大石のまの神のありてあるいゝかみも有るあり

荒塚 大佛の西ハ西田圃の中より五輪の俗に入鹿の墓といふ事實詳あり

雷丘 雷村より飛鳥の神金備山より雷丘雷山神山ともいふ
飛鳥の乾二丁余

日本紀曰大泊瀬幼武天皇雄七年秋七月甲戌朔丙子
 天皇詔少子部連螺贏曰朕欲見三諸岳神之形汝
 力過人自行捉来螺贏答曰欲往捉之乃登三諸岳捉
 取大蛇奉示天皇天皇不奇戒其雷虺虺目精赫赫天
 皇畏藏目不見却入殿中使放於岳仍改賜名為雷
 和漢之才圖會云神捉連初名少子部連螺贏臂力人過雄略天皇
 七年七月二日勅奉日三諸岳之神使墨坂之神と捕ふ其長二十尋
 三尺の大蛇あり走りかつて頸と取り引来る路邊の人屋威氣のありは皆
 倒る大殿に至るに天皇甚と畏る目と舉るに堪わらば而つて放つて神
 怒り人々紆て回つて輪大神吾とく之より下りて天皇安ん見んと欲て
 人の手に搦み大斎の祓除成用とせんと歸る事を得ばとつて堂殿
 皆震動に因て祭供と行ひ祓解と修成而して神歸る遂に少子連乃
 名を改めて神捉と賜ふ同十二年四月廿七日大殿霹靂に諸妃采女恐れ



少子部連
 勅命
 雷神
 捉ふ

怖く時々神捉連禁内へ陪る。勅曰天雷とても怒あり汝任ておきて捕
獲し神捉連駕へ乗せ鞭を奉る雷聲汝追て曰人氣ハ實に存る鬼氣ハ
虚とて現る者何ぞ汝汝汝とて鬼若勇力に來て吾と力を
競べし追て雷の丘に上る雷神降る感つて馬と踏るすなり馬
驚き飛ぶ虚へ昇るこゝ十丈を走り雷神怒りて地へ墮つ形相あり
率々大殿に上る天皇一目見て懼れし再覽のて終に諸殿雷鳴電
光とて致ち遣んとすも退る神樂を奏しとて和らぎ祭供を
修しこれ汝食に遂に雲より飛ぶ天皇神德を輕んぜんとす
神捉連の名を改めて雷字を加へし神雷捉と移し又鬼捉連と名を雷形
赤き鬼ありとて雷の墮る地汝號を雷丘とすト云日本紀の記
此地ハ則ち飛鳥の神南備山あり是より改めて雷丘と呼せりありト云
天皇御遊雷岳之時柿本朝臣人麻呂作歌一首
皇者神二四座者天雲之雷之上雨廬為流鴨

あつれば此山へ行宮りて幸一のひ時人麻呂御供とて詠しと云
又天皇持統天皇おとんと畧解に永々注せり

大國御龜神社 同村あり今八王子と稱し 神名帳三代實錄出

飛鳥坐神社 飛鳥村あり 神名帳出 四座合殿 飛鳥太神宮と稱し 小祠五十余前

本社四座祭神 事代主神 高照光神 中社二座 素盞鳥尊

奥社二座 天照太神宮 豐受太神宮 末社八十坐 惠美須石 本社左の傍にあり形の
似るを以て号く奇石

飛鳥井 鳥居の傍にあり 催馬樂回 花井よりハナハナとありけりありト云

大原 飛鳥の東二町余にあり大原村なり

天皇賜藤原夫人御歌一首 天武天皇

吾里雨大雪落有大原乃古雨之郷雨落未者後

大原之此市柴乃何鹿鹿跡吾念妹雨今衣相有香裳

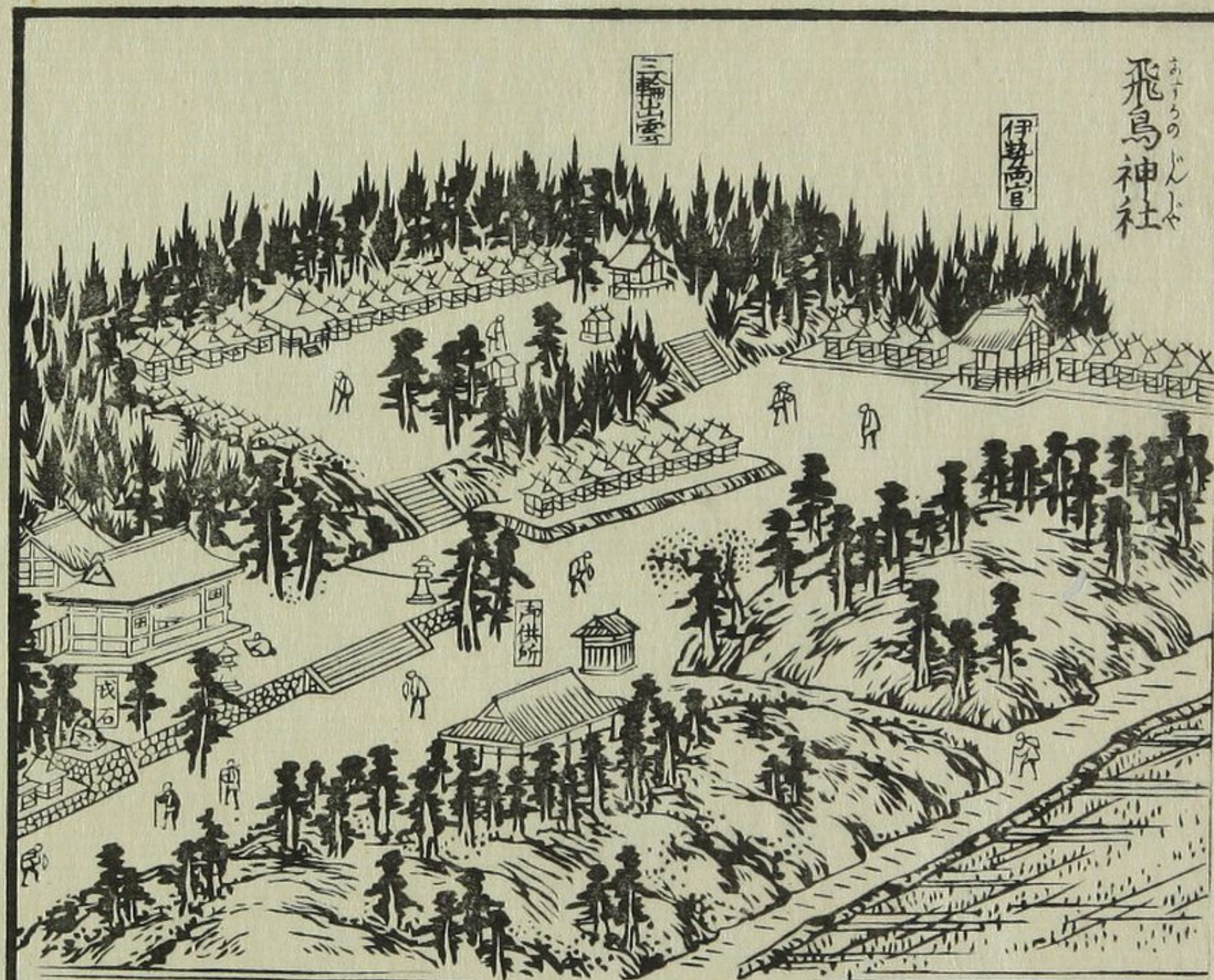
藤原 大原と同所とて名を異し

友原のち一邸乃枝芽子ハ咲くなつきをあらうとて

飛鳥神社

伊勢宮

三輪山



飛鳥の社、俗に本伊勢と称して、
本社の前後に伊勢両宮二輪
出雲と始り八十坐の本社境内に
列あれり
一の鳥居、村中の街道一のり

玉葉

雲井

土御門院

とよの

らふ

う里

権大僧都

まね

う

し

ね

千五百番

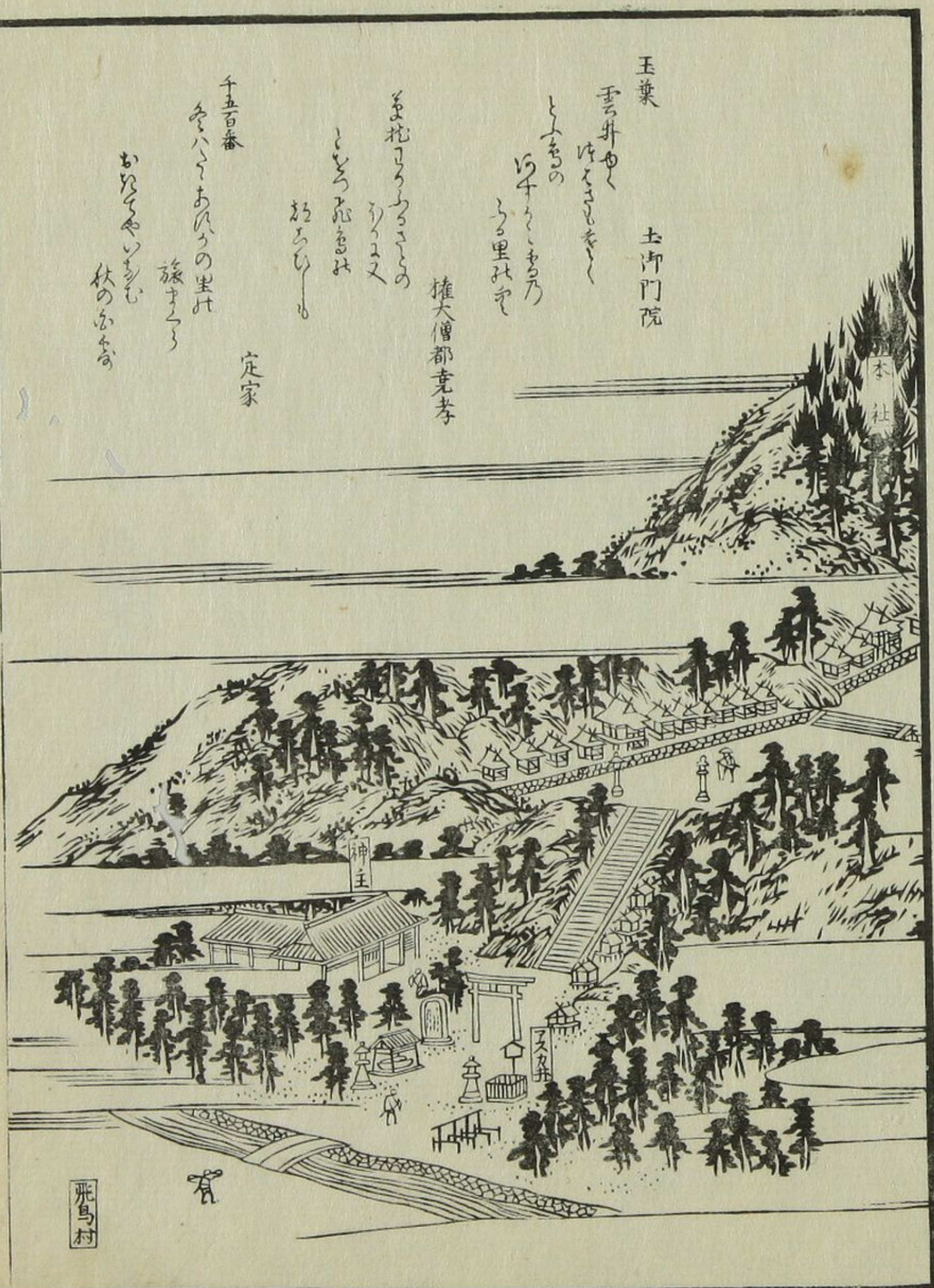
あ

旅

お

秋

定家



大織冠社

同村より此地藤原宮の舊趾ありて社僧藤原寺とて守護

本社 大織冠鍾足公 八幡宮 并 護法善神祠 本社の傍あり

此地往昔藤原宮の舊趾ありて後世大織冠の宮と造宮ありて也

藤原宮八人皇四十一代持統天皇飛鳥の淨御原に在りの時行幸あり

かして藤原の官地と畝覧ありて同御宇八年に遷都ありて也

度雲元年十月より藤原宮と定めりて宮中百姓二千五百五烟と

入り布とありて差あり 續日 四十二代元明天皇四年藤原宮に上りて

拾芥抄曰法光寺中臣寺も言いが今入りて藤原寺も言う大

織冠の氏寺ありて法光寺の舊趾に詳ありて後世是と再興ありて

藤原寺とて守護ありてあり

大織冠藤原寺址

大織冠の社の跡に樹木繁茂せしありて周竹垣と結りて此地の

舊址ありて埋井八則産湯の井の古趾ありて是に連なりて傳ふ此地大織冠の誕生乃

按る藤原の御井の清水ありて清水の奇蹟あり

大織冠鍾足公大和國高市郡の人なり其先祖八天兒屋根命の裔と

世の昔より天地の祭祀と掌りて推古天皇廿二年甲戌八月十五日大

藤原の第に生れ給ふ 叙書家傳一説に八常陸國より出たりの人も見へり

大鏡 天智天皇八年十月内大臣從二位鍾足公病臥し重なりて勅ありて

東宮大皇の弟と藤原の第に遣りて大織冠と大臣の位階ありて

藤原の姓と賜りて其翌壽五十六歳とて薨りて一説に此大織冠の冠正

一位の冠とて最譽れ高きとて大織冠とて號しと

本朝通紀曰内大臣歷事于孝德齋明天智之三朝不貳先

村入唐之履送資朝廷安社稷後改制冠階定禮儀之規

三朝之善政多頼内大臣之功者也然大臣以為味足盡

臣職故以生無務之語遺奏薄葬宜哉時賢聞有此一言

比於往哲之善言歎嗚呼自古人各有小功則誇其功使

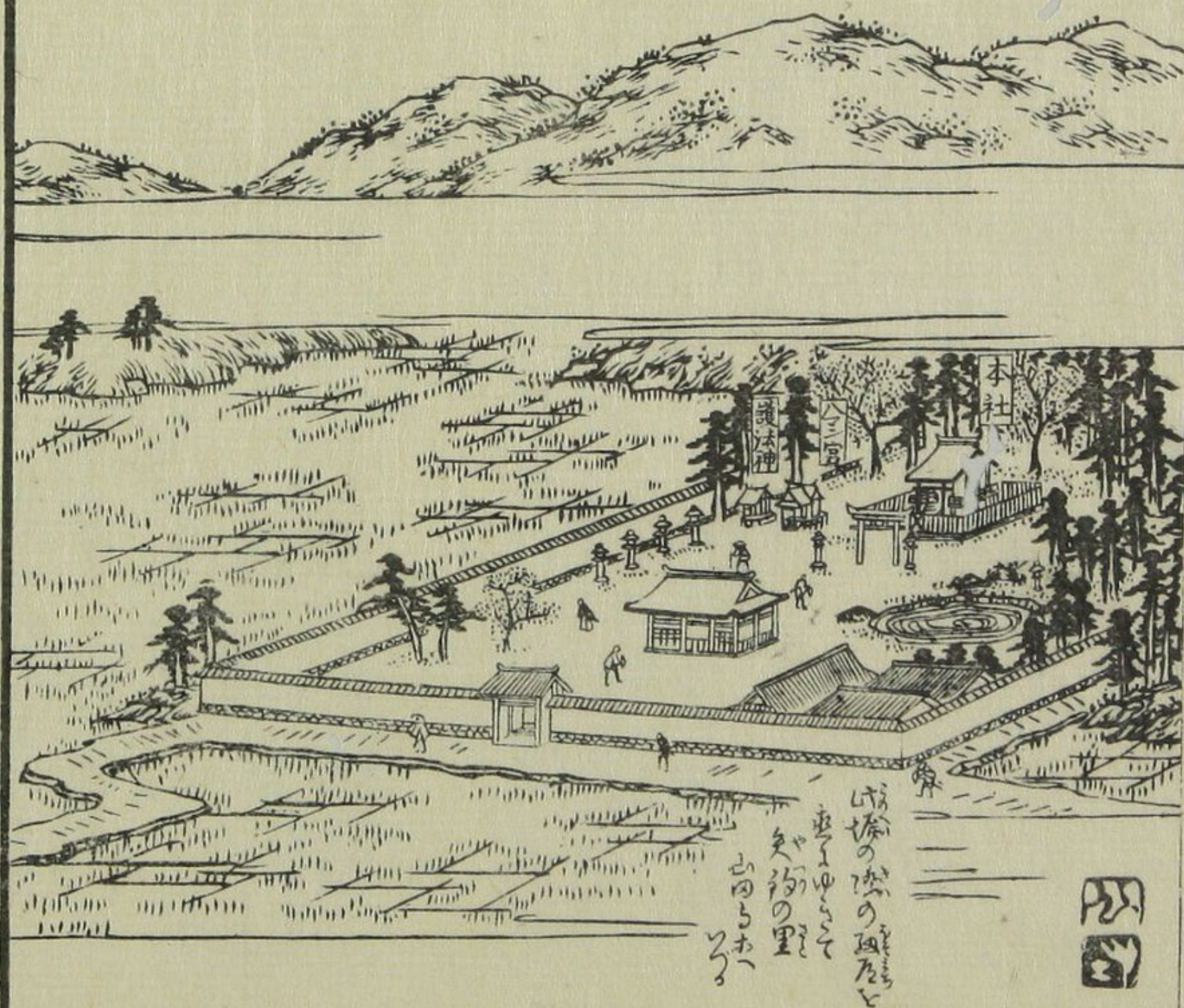
其勳無君為國乱者夥矣故曰小人有非常之功者國不

幸也今大臣其功冠諸臣猶未足可謂知臣道善哉天皇

大織冠神廟
藤原第趾

大織冠の社の
地は藤原の
宮の跡の跡

藤原の
大織冠の
跡の跡

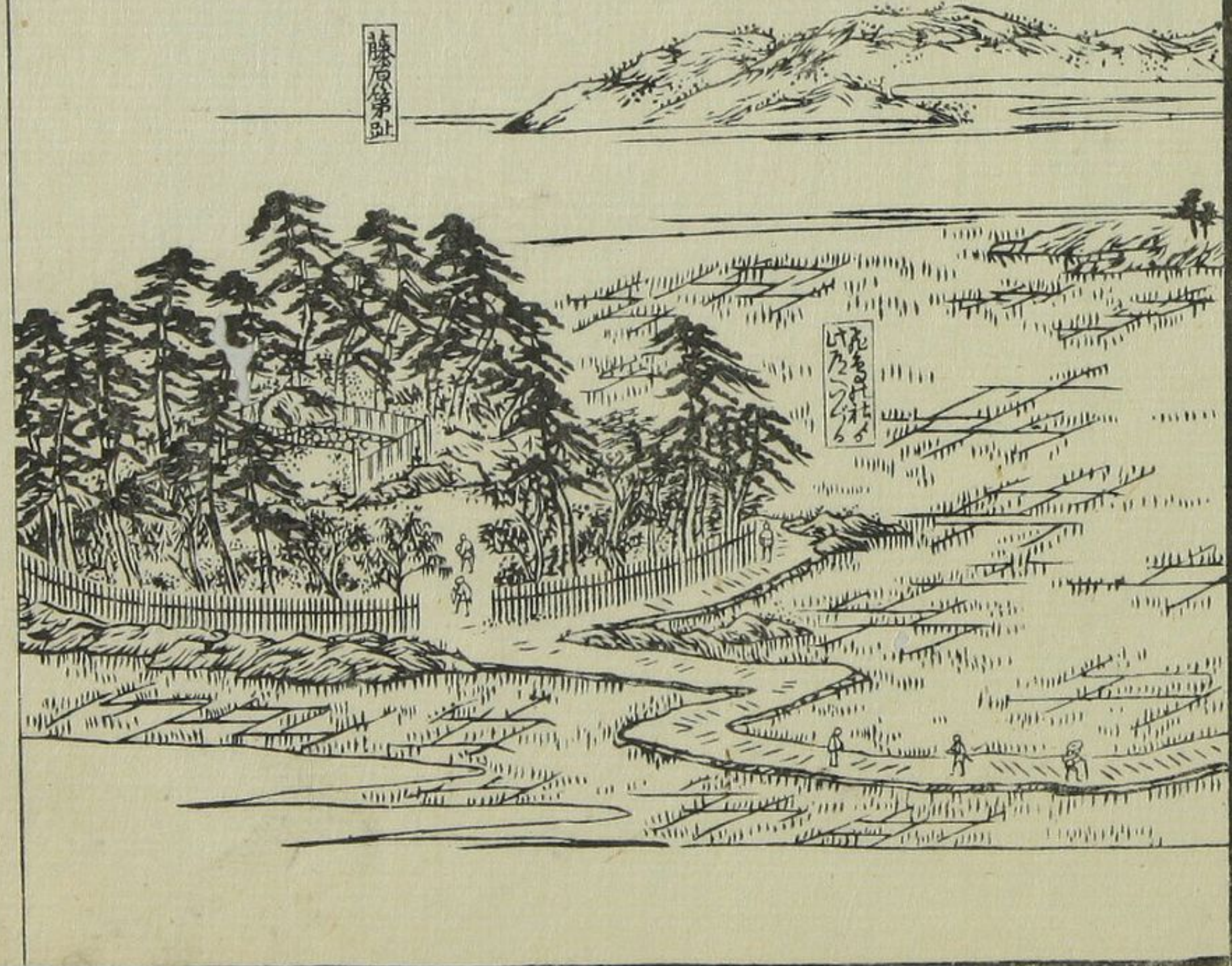


藤原の跡の跡
大織冠の跡
大織冠の跡



大織冠の里
藤原の跡

大織冠の跡
藤原の跡



藤原第趾

藤井魚

藤原の御井と、同所といふ、今津、あづむといふも、
すつと此辺をといふなり。

夫木

けふの炭井が京路ふくづねろくや茶屋さうせん

後九條

藤原宮御井

藤井が原同所より

八隅知之。和期大王高照日之皇子應妙乃藤井我原雨大御門
始賜而埴安乃堤上爾在立之見之賜之者日奉乃青香具山者
日經乃大御門雨春山跡之美佐備立有畝火乃此美豆山者日
緯絀大御門雨珍豆山跡山佐備伊座耳爲之青菅山者皆友乃
大御門雨宜名信神佐備立有名細吉野乃山者影友乃大御門

從雲居爾曾遠久有家留高知也天之御蔭天知也日御影乃水

此歌のころ、銅林抹葉曰藤原宮に東西南北の大神門と云々れり始めの二六
日の経緯よりて方角と云々後の二山の陰陽と云々めと見えり周祿日
本紀に「東西南北日經以南北為日緯山陽曰影面陰曰背面是以百姓安居
而天下無事焉」と

矢釣山

藤原の近辺上ハ釣村の
上の方より飛鳥の良
八釣宮
入皇廿四代顯宗天皇近飛鳥ハ釣宮にて即位
中り尚此宮にて崩のつゝ日本紀に見えり

萬世

矢鉤やこう山木やまぎ之の足あし下した落おちここるる者ものををああるる所ところにに取とりりぬぬけけも
柿かき本ほん人ひと磨みが

東大谷日女命神社

山田村より今八幡と移し神名帳に出
此地八十市郡に属し

山田寺

田寺 山田村より華嚴寺といふ舊我倉山田麻呂の建と聞ゆ今より其古跡を存し伽藍古礎草堂の傍に修葺あり大和名所國會に孝德天皇五を舊我倉山田大臣建立しゆ然るも考徳天皇四年に改めて大化元年といふ言はれ大化二年の頃大化五年に至つて舊我倉山田大臣撰言の如く此寺に入て自教するといふ日本紀に見ゆ

本朝通紀曰 大化、とくへ 年春二月、そ 薨我日向、ぐのひう 播殺其兄、はつりてきすあ 右大臣倉山田麿、いみむらう 日向

身刺し大臣山田磨呂と皇太子に縊て曰く僕が異母の兄倉山田皇太子が海濱に遊びて伺ふ時害し奉らんといふ太子其言成信し天皇は結し天皇則ち使と大臣の所遣し及謀の虚實を問せり大臣答曰問るの報ハ僕面々天皇の所陳べし天皇又使と遣して是と問大臣又前答の如し是よりして天皇將小軍と與り大臣の宅を圍んと大臣妻子と時ひ山田寺に逃る大臣が長子興志軍を率て官軍と拒んと大臣誅せしむ凡人の臣者安ぞ逆と名を構ん乎今我日向に誅せしむ横以終時と易しりん為り言畢つて則ち佛殿の戸を開き誓を作て曰く願わ我生至世天皇と怨む誓ひ絶つて自殺し死に殉ずる八人あきにいつて日向寺寺園にて物部の塩とて大臣の頭を斬りむ是時當つて戮せし者十四人括捉て絞る者九人遠流せし者十五人京師大に操動はる

續日本紀曰

文武天皇二年六月戊戌施山田寺封二百戸

大官大寺廢址

山田村より田圃の中地形小高れ所りて礎石あり其礎石の徑凡そ尺許柱四尺五寸余又かゝる塔の礎石心柱の礎石より物より大官大寺は昔五大寺の一なり此地高市の郡に属し

日本紀曰天渟中原瀛真人天皇二年冬十二月造高市大

寺今大官大寺又朱鳥元年十二月為天渟中原瀛天皇設無遮大

會於五寺大官飛鳥川原小墾田豐浦坂田

大官大寺より六百餘の川の側よりて百餘の大寺と号せし時川の側は九重の大塔と建らし後大災より焼くこと七つこれと文武天皇二年に高市郡に於て再建改めて大官大寺と名は日本紀より見ゆこれ大塔の礎石より再建のひ九重の塔の古跡あり後大寺良の都よりこれ大官寺と更なるなり也

香具山興善寺文珠院

戒下村より真言宗僧坊五宇あり十市郡に属し

本尊文殊菩薩

安河除作 御影堂 弘法大師と安河本堂の左山の半腹より

神明社

本堂左の前の山より 持統天皇行宮古趾 神明社の前より

御供所

本堂の左の傍あり 鐘樓 本堂の前より 波置池 本堂の正面石階の左の傍より填の池なり

往古天照太神此れにおろし秘法の要と現下國成福一民と益善哉興凡

故号とせり中世の開基、隆俊上人又豊臣秀吉公より金首とて、伽藍

開基の紀に見えり帝王編年曰香久山之学院に見えり

二階堂古趾

天香山の北表にありて今も名をのこるなり二階堂より草創あり

天香山座櫛真命神社

香具山の北麓より南浦村に属し北浦神と称し石鳥居の額曰天香久命 神名帳ありて代實録出

埴安池

日本紀曰神武天皇天香久山の埴土よりて八十平倉とて埴安池とて埴安の池の堤のともつゝの一方集見あり

香具山離宮

香具山の神社の地あり傍に源泉ありて行宮の泉とて、持統天皇の離宮の古跡なり

天盤戸

香具山奥善寺より西二町よりありて敷地の中より竹垣と結みなり前より石の燈籠あり此櫛の内ハ

湯篠

右盤戸より半町より南田圃の中に竹垣と結みなり其古例よりて伊勢の祭礼のせり此盤と取て来りて毎

天香山

香山 高山 香来山 芳来山 天竺山

高市岡本宮御宇天皇代

息長足日廣額天皇 明神

天皇登香具山望國之時御製歌

萬葉

山常庭村山有等取與呂布天乃香具山騰立國見乎為者

國原波煙立籠海原波加萬日立多都何怜國曾蜻島八間

跡能國者

萬葉考別記

大和の國ハ四方に廻りて國の中ハ平らなり香具山耳成山畝火

山のこの各獨り立其の山の中より香山より也畝火ハ高く耳成ハそれ

藤原の宮所ハ此の山の中より香山より也畝火ハ高く耳成ハそれ

次香山ハ中より低き形ハ富士の山と小く作まる如く住古四方の麓廣く

木繁く次より萬たひて美りけき取らる天の香久山ハ詠る也

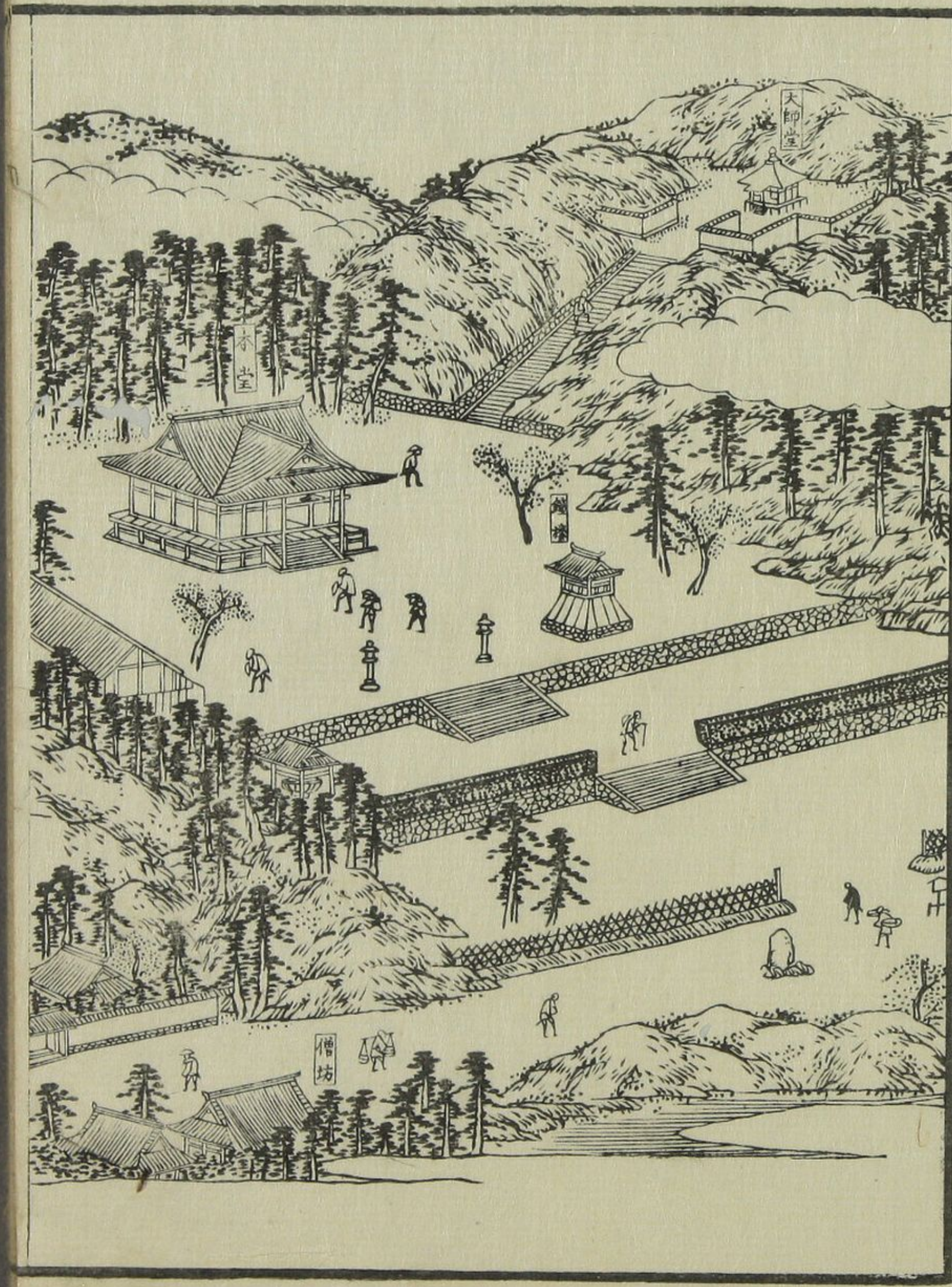
相此山の畝尾ハ西より引殊一東ハ長く曳りて今もその畝尾の形より

残る其畝の本に二町四方より池あり是より一町の埴安の池の

残れり彼池より八町より東北に池尻村池内村より里の今よりハ一

此池の大きき事知れ夫ハ後ハかの畝尾と崩れ池と埋て田所より里居

あや者より斯き此御歌其地と海原見ても詠ゆ且かの香山乃



香山文珠院

万葉
久々の天竺方山

いづれ
まらまら

中一香具山へあづきうき一萬一便りき登りて國見し一のひり山
の北のそとに櫛真神社今もあづき其昔うき一畝尾の末と思
所今異國の神の名と社なり是を彼天女神のあやせ所也
飛鳥の神主といひなり近頃の人名高き香久山を高く
そに思ひたり此國へ行て見く此山はうき一此集の中大兄
命の二山の御歌と藤魚宮の御井の哥其外此山は歌と
に必今つ一香具山に遠ひあづき取らひいり山と神の御つ
あづき人崇む一高き人の寄んやれ今一峯もふも木を伐荒
池も多埋て見所なく成て思一思ふ昔のうき一以て有
状と奉てい一思ふ人傳へて

春追而夏来良之白妙能衣乾有天之香来山

持統天皇
御製

此御歌持統天皇の御歌なり淨御原宮にあり時夏の始のころ埴安の堤の上と幸
わき一香具山の辺の人家に衣のうき干て見く一實一夏の末にあらんと有けり
のうき一あり夏はうきの物あらき乾常のうき一尚畧解に詳あり

香具山法然寺

標石勒曰

天香山の鏡無類聚澄月哥枕伊豫風土紀古老の傳おまづ有る一香具
南浦村にあり淨土宗本尊阿彌陀佛觀音勢至ともに鳥佛師作
山林院と号し持國廿五靈場第十番
頃久二年二月八日組大師高野山參詣の故に當寺に御足とあり諸人御足
ゆき一尊と遺跡あり本尊あり二大土といひ鳥佛師の作て後乘坊重
源上人の念佛高野山新別所一字の尊像なりと云夢と蒙り當寺に安置
奉る尊と靈佛

畝尾健土安神社

下八釣村にあり今天照太神宮と称し
神名帳に代實録出

鴨事代主神社

高野村にあり今天照太神宮と称し
市縣主許梅神著て純宣のうき一後小鎮坐に代實録出

鷺栖神社

四谷村にあり今鷺栖八幡と称し近隣五ヶ村の氏神といひ
井といひの今にあり一系系といひの今にあり

藥師寺廢趾

本殿村にあり藥師の草堂二字其傍一圓に礎石あり又大塔の心柱の礎あり
周の礎あり

甘樫坐神社

豊浦村にあり今推古天皇と称し
神名帳に代實録出

味櫃丘

又甘樫岡とも書き豊浦村の東飛鳥川の西岸に甘樫と稱し此所に岡山あり
又甘樫天皇四年の姓の真偽はあらず一甘樫丘に金とて神一香具の熱湯に
あづき一實ある人あづきの事なり一傷ある人傷れり一事なり一余り
あづき一退き一退き一退き一退き一退き一退き一退き一退き一退き一退き
あづき一退き一退き一退き一退き一退き一退き一退き一退き一退き一退き
あづき一退き一退き一退き一退き一退き一退き一退き一退き一退き一退き

我蝦夷第趾

右甘樫の岡の西に池あり其西の方我田と字とて田圃あり是則蝦夷田の跡と
正一蝦夷第宅の跡なり彼長直とて者に命して蝦夷山のいりの家と

造り池を穿り堀とつくりて地形を符合せしむるを、入鹿が第宅を宮門と号せし也

甘樫丘須弥山 古跡詳あべ 此地の傍なり 日本紀曰天豐財重日足姫天皇 明五年春

二月廿日 甘樫丘東之川上造須弥山云

難波堀江 豊浦村より今出川形と存せり 玉林村曰豊浦寺の東の佛門の尚事、飛鳥川の西の入口は是なり、當世幽遺難波堀江、宇屋大連堂塔と燒き佛像とあり、所より昔、廣くて底よりもろもろと、いふ海

本朝通紀曰敏達天皇十四年春二月天下大疫宇屋大連奏焼佛

像擒僧尼禁錮

國內疫疾大一起つて死者甚多、物部守屋奏して曰く陛下

臣等言すを用ひて先帝より陛下に及ぶまで疫疾流行し豈專ら

馬子が佛法と興行するに由り邪に武帝守屋に詔して曰汝が言事然

宜し佛法を断ぎ是より於て守屋自ら寺に詣つて佛塔を斫倒し佛

像及び佛殿を燃し灰燼の余佛を以て難波の堀江に棄る又有司命

して善信等が衣を棄し海石市の亭に禁錮し

又善光寺の縁起に、攝津國難波の浦にて佛を取奉るもの、又法隆寺の旧説に、大和國難波江決定に侍る疑いありとある者、唯管見に定めて、傳云本寺善光といふ者、此所と過る時佛告りて佛像成有りて信州にうつりて

廣嚴寺 同村難波の地の傍なり今廢して、お堂一宇僧舎一坊存、又向原寺に作る又名豊浦寺といふ傍に井あり、接井より又名櫻葉井云

欽明天皇十二年十月百濟國の聖明王、親迦佛の金銅の像一軀、幡蓋

經綸數卷と將來して帝に獻て佛法の功德を奏し、天皇これに歡有りて

群臣の譯儀を聞りて、猶我大臣猶月奏して曰今西蕃の諸國皆悉く

信智せり我朝獨尊と云と背りん哉、時物部大連尾輿中臣連、鍾子等奏

して曰夫我國ハ恒々天神地祇百八十神と云、春夏秋又祭拜し、ゆゑ事人

代及びて、既一千有余年、異國の法を修せりて國家清平なる事、萬國に勝る

る方、今改めて西蕃の神を拜祭しん、恐るる吾國神の怒り有んと、逸つて

奉るなり、天皇の曰宣く情願人付べし、て佛像を、猶我大臣猶月賜ふ大臣あれ

受悦び、お聖田の家を置、向原の館を、淨めしめて寺と号し、早けて向原寺といふ

是日本に於て寺院と建て佛像を設るの推興なり、然るに今歲天下大疫、廣



敏達天皇十四年
 宇屋大連石川の
 御舎の火の佛塔と
 焼却
 今尚和田村の
 塔の田字する
 田地の其内
 つくう墳の如
 北高た野あり
 られ回趾の
 まうあり



僧尼一諸有て猥々々々淫淫する一聞候ふ速に僧徒追拂ひ二尼とて
佛殿と焼くをせん神明納受あつて疫癘止む事疑ひらるるに松久を
此時馬子宿祢朝廷を程守屋に属し群臣人の言いつて異言以
此事を奏しんば天皇守屋が奏するに任せ紹く甲乙然あつても佛
断て守屋大連奉つて自ら軍吏の輩と引率し先石川の宅の東より
佛殿を押し其身は寺中に胡床をて是に踞坐諸卒と指揮し命に従ひ
徒卒の煙の炬を振ると佛殿佛像のく火と放ち焼くを憐れ
美麗と盡や高樓大廈はちちち備天の火と変ト猛火東西に吹ち形
勢目と驚膽を滅し事トも也乱火の下より逃出る僧尼烟にむせひ手足成
ろく漸く適き出ると軍卒二尼を擲し直大野の丘に至り斧を揚て佛
塔と斫倒し及も火を放ちる是日天一雲あひ風吹起て大雨降下る事
恰も盆と傾るに徒卒は是を見て是は奇異ある天変ある必定佛天の怒ある
う頭をうて叩けし守屋子にも驚れ恐るる雨衣と被し猶余煙の中より有て

馬子一族並び僧尼と罵り佐伯の連御室下知て二尼を禁し海名摺市
の亭に牢と造りて入らせ佛像経巻の焼残りたるものを悉く難波堀江に棄て
しめ多分日本紀叙書
太子傳
田身池 同村より多分武池にも書き
夫木
下りてて川やつてん今且このたのむ乃泥しゆる高瀬

石川精舎廢址 石川村より今本明寺とて浄土宗の寺なり地甚高きなり馬子の塚
又山の字に花嚴寺山大衆寺山感道寺山ありて寺の待寺院の旧址あり
撫我馬子石川の第宅の側於て堂舎と嘗て有るに馬子の第宅の旧址あり
抑石川精舎といふ住古人皇二十一代敏達天皇十二年秋九月百濟國より
鹿深臣來朝して鈴勒の石像一軀と有る撫我馬子とて七請て石川の宅の側
に於て殿と嘗て安置せり然る其時香火と奉る者あり斯く程に先は震旦より
來朝しり司馬達等といふ者あり馬子ありて四方の沙門を尋ひ來朝の人あり
しむに播磨の比丘に似る者あり慧便といひ高麗國より來朝の人あり
日本の中は佛法行ふもざるが故に俗に混じりて有りし馬子是と貴し即ち鈴勒

の像と致して斎會と後けき司馬達等も其會式に預り忽ち斎の飯の上に
あて佛舍利と得るは則ち是と馬子に獻じ馬子其舍利と鐵砧と置つ鐵の
錘とで打て試みは質も錘ももに隔むとて舍利はさくも損ず又水に
投じても沈まず馬子は是を益く信致して石川の宅と佛殿とつる是則
石川の精舎とて佛法の始と聞也 日本紀叙書
石川村とて一畝の周凡七丁半あり

日本紀曰譽田天皇 神應十一年冬十月作劔池

同 舒明天皇七年七月此池一莖に二の花の蓮花咲り云

又 皇極天皇二年六月此池の蓮一莖二の萼ありの生と咲り是

獲我臣が將來の瑞ありとて即金墨でて書く大法輪寺に大なる佛を獻じ
卿佩手劔池之蓮葉雨渾有水之往方無我為時爾應相登

相有君乎莫寢等母寸巨勢友吾情清隅池之池底云

孝元天皇陵 同右劔池の中の島あり宇中山塚とて故劔池の島の上の陵なり
島の根廻り凡二百四十間余嶋山の高凡東西七間南とて北とて八間なり山陵の

高凡二丈根廻り凡六十間許是より凡四間なりとて高凡二丈より根廻り凡廿間なり墳又
高凡一丈より根廻り四十間許の墳なり陸葬の地とて都合二所あり

日本紀曰 大日本根子彦國牽天皇 孝五十七年秋九月壬申朔

癸酉崩 推日本根子彦大日天皇 仁五年春二月丁未朔

壬子葬大日本根子彦國牽天皇于劔池嶋上陵

前王廟陵記曰劔池嶋上陵 輕境負宮御宇孝元天皇在大和國高
市郡北城東西二町南北一町守戸五烟 諸陵式

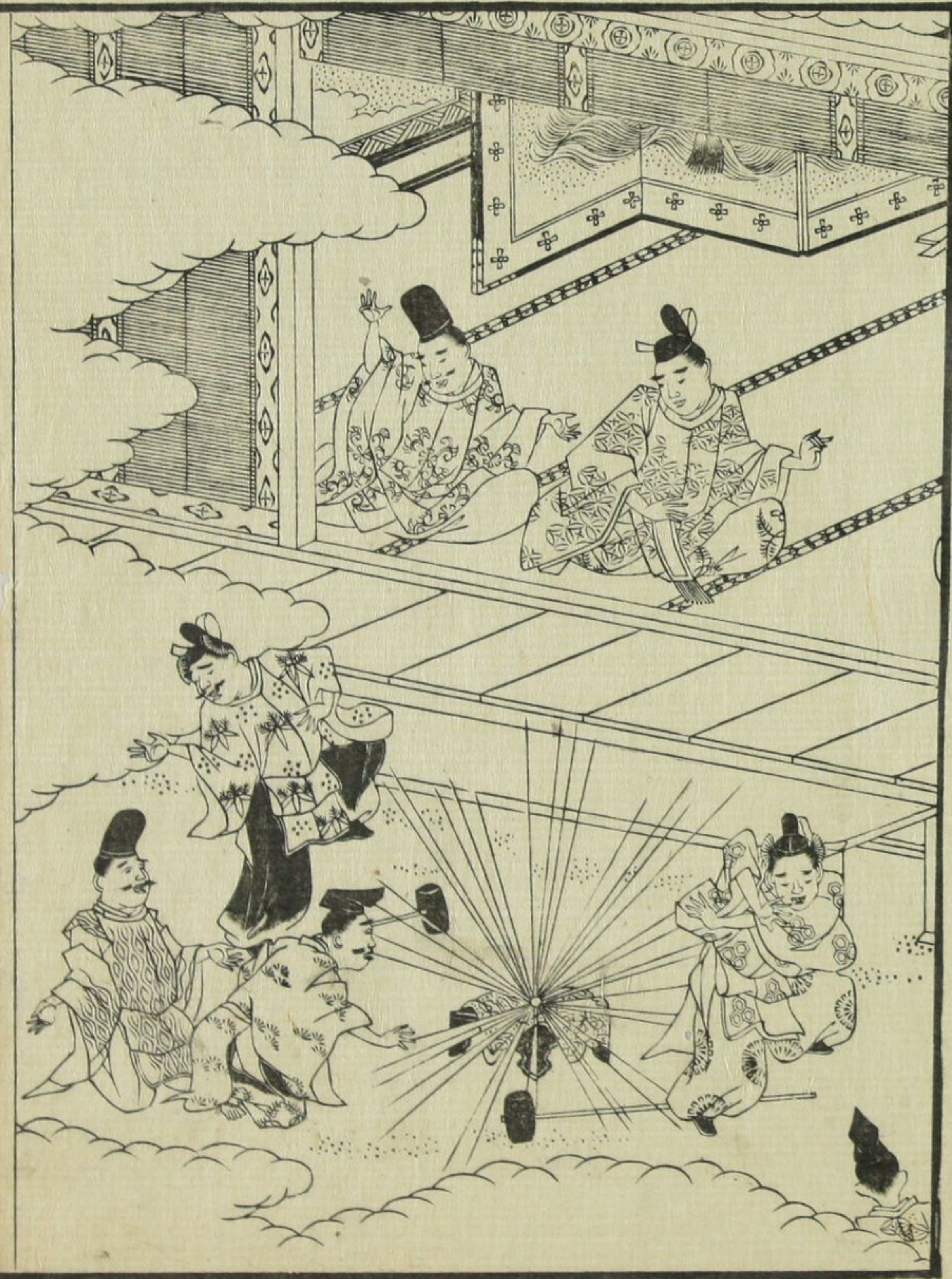
或曰劔池在高市郡難波池中有靈劔云

田中宮舊址 田中村其のあり昔人王三十五代舒明天皇皇居のいし址ありとて

大窪寺廢址 大久保村にあり今觀音堂あり地其跡あり云金堂塔の垣外ありとて

娘子墳 同村より傳云昔此地に女子ありて容貌美麗なり傍辺の人道路よりて賞せらるゝあり
其名を娘子とて又二人の壯士ありて是を娶んと欲しつゝ死に貪みて相敵は娘子は心やす
相害を承く息んとて林中に入て樹にかり縊きて死にあり此事萬葉集の序に見ゆ根州免原郡に
求女塚といふ所の三所あり事實

靈禪山東塔院久米寺 久米村にあり 真言宗叡太山の南七八町ありとて



本尊 藥師瑠璃光如來 座像長八尺 脇士左右日光佛 月光佛

脇檀 左 聖德皇太子像 右 久米皇子像 兩尊ともに坐像也

十二神將尊像 本尊の傍に列

御影堂 本堂の左傍にあり 同左の前より 地蔵堂 御影堂より

觀音堂 十一面觀自在菩薩 長二尺八寸 荒木作 左の腰に此の體觀音右の腰に

多寶塔 本堂の向う右の傍にあり 住古の大塔の礎石四面にあり 教十二あり 大日如來と安

辨財天女祠 多寶塔の前の 天神社 門内の左 善無畏井 鐘樓の傍にあり

當寺ハ聖德皇太子の御弟久米の皇子の御願より皇子感得の一寸二分の

藥師の尊像と黄金の壺一納りて本尊の佛胸に安置しより多寶塔を養老

年中善無畏に藏來朝し當寺に二年住り南天の鐵塔の半分を換え

し其心柱の下に佛舍利三粒大日經七軸を籠りしより佛法傳通

に見えり此大塔は多くの星霜成経る大廢し今見所の多寶塔は後

世京師寺務仁和寺の塔成るに移しと聞也住古の大塔の礎石は猶此四京

遺まら 住昔坊舎五十宇余ありしより手領ありて農業をいふ

延暦十四年弘法大師夢の告を蒙りて久米の道場の東塔の下より

彼七輪の經を得りしより人事釈書に見えり旧名來目寺弘法大師久米寺

と改字せしより中興開山妙瑞和尚と聞也

久米仙人 久米の仙人希とて女の腰の白きを見て墮落せしより事緒書に載て

元亨釈書曰久米仙ハ大和國上郡の人なり深山に入り仙法を學び松葉

食して薜荔を服せり一旦空に騰つて故里を飛過るゝ婦人の足と衣を

踏洗つて見せり其腰甚で白く忽ち深著の心と生じて即時墮

落りたり夫より漸く煙火の物と食して塵域の交りて却りて郷里

の人より券約の證文に其名を連署する時いふ前仙某と書りて此

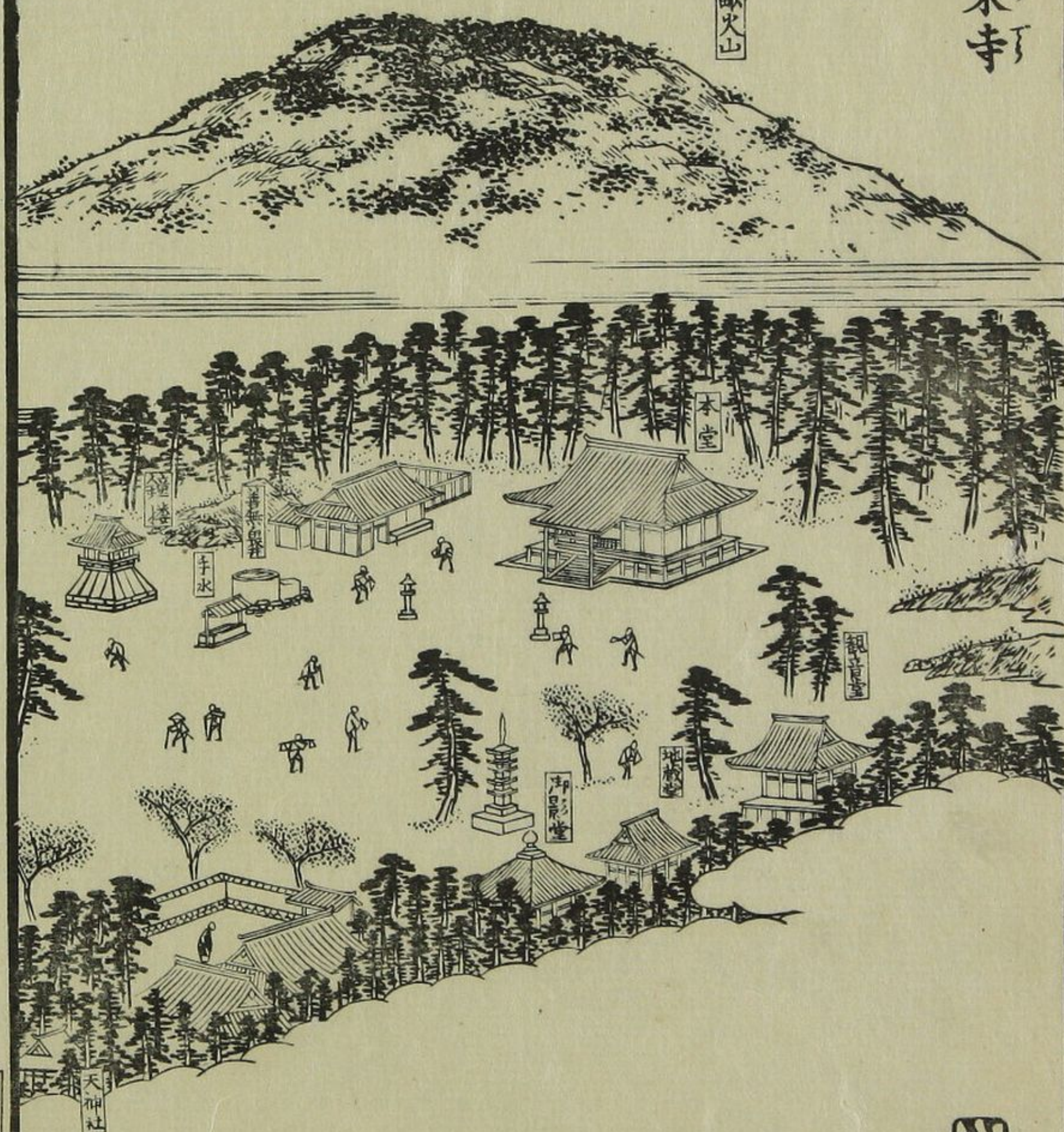
故に以て今舊券の簡文の中に住住とて手迹つらるが如くに書おけり

嘗て高市郡に於て精舎をいふも構大の藥師の金像ありて二菩薩像

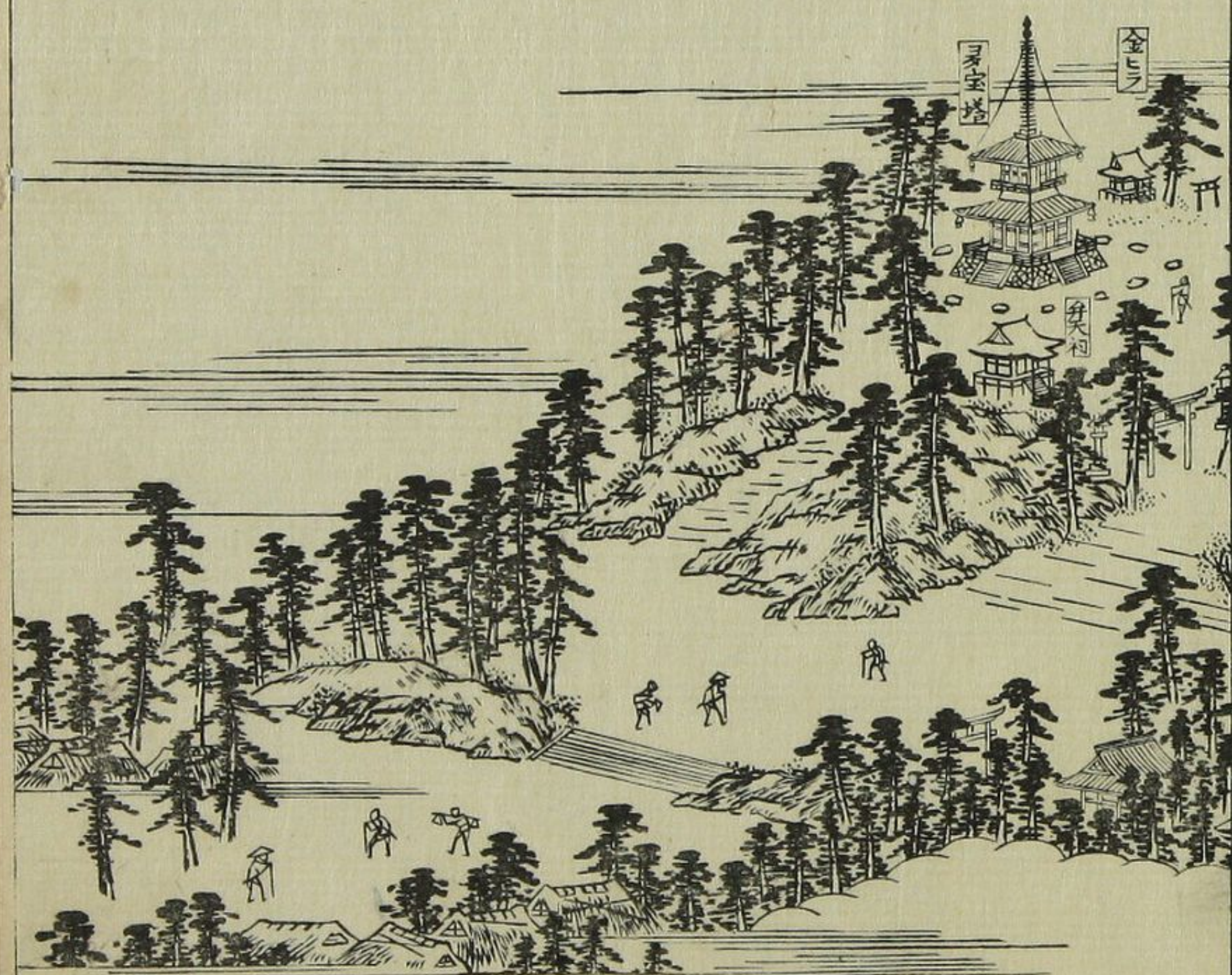
と鑄りて所謂久米寺と也其後又仙道を修行つて空を凌びて飛去る

久米寺

國火山



當寺、聖德太子の御弟久米の皇子の御建立して久米の仙人が建立したる久米又古昔の大塔、善無畏三藏末朝、南天の鐵塔の半分と奉造られしを今尚古礎の存せり當時の寺宝塔、後世京師仁和寺より搬入せり又世々久米寺の宝塔の真柱の銘とくろりの有て空海の作あり言傳ふ然るも是も後人の作とて信用すべからざるに故に記され



又扶桑略記より所も大概同じ今昔物語結に云く六異なる事多くて何れも信用ありと云へた古俗の寓言なり然るも久米の仙のつづる有るふれぬ女之腫と見て通し失ひし事ハ唐山の故事に附會し又萬葉集に久米禪師石川の郎女と婢時の歌りて作と後世にのちる一変一玄同放言に著せり云々畧れ

芋洗川 芋洗芝
久米寺より五丁より東にあり是も久米の仙の物語にして後世に云く一のう又つづる川の名ある芋洗のつづる地名地所もあつて此地に女子の白と腫と見てつづる女子と芋と云ふ一変一玄同放言に著せり云々畧れ

久米御縣神社
久米村にあり今天神と称す
久米川
檜隈川同流して真弓に至る久米川といふと云ふ

輕樹村坐神社
地尾村の属村輕子村にあり 神名帳おひこ代實錄に出

懿德天皇陵
畦堀村の西南鐵沙溪にあり 祠廟 畝火山の東北よりて此所と凡陵と称するも更にまじりて中より畝火山の西南に添ふ真名子山の山を導く是正に諸陵式に云畝火山之真名子谷の上と云ふことまじ

懿德天皇祠廟
畝火山の東北往還の傍より凡そ此と陵と称し地形の高さ四尺許子芝惣周四十五間許此内雜人牛馬糞り入つて林あり 神社石燈燼あり

高市御縣神社
四條村にあり今高縣宮と称す 神名帳おひこ代實錄に出

神武天皇御陵

日本紀曰

神日本磐余彥天皇 神武
七十有六年春三月
甲午朔甲辰天皇崩
于橿原宮時年一百
二十七歲明年秋九
月乙卯朔丙寅葬畝
傍山東北陵云々



神武天皇陵

四條村より山の高凡北より二丈南より七尺惣根廻り五十回余周惣溝堀割

畝火山東北陵畝傍檀弓宮御宇神武天皇在大和國高市郡

兆域東西一町南北二町守戸五烟諸陵式

古事紀曰畝火山之北方向禱尾上

性靈集益田地碑銘序曰畝傍北峙

前王廟陵記今按畝火山今奈良の西南二里久米寺の北俗云慈明寺山是

東北の陵百歩可至以来壞糞田より民其田と呼で神武田と字に暴

の為多痛哭とて又數畝餘と一封とあり農夫あるに登るは怪

怪とありと觀及んで寒心次夫神武天皇六神代草昧の蹤成つて東征

て中州と平らげ四門成闢八方を朝せむ王道の興治教の美實此を創

する我國君臣億兆當に尊信と致してこの廟陵ありと

畝火山

畝植村の上の方にあり巍然として特立他山相連あるところ大和國三山の二なり

畝火畝傍畝植畦植雲飛雲根火

萬葉

畝火山口坐神社

畝火山口坐神社

むらゝ畝火の山腹にあり今山の頂より遷に祭る所神功皇后あり畝火

に神祠の址とあり今御祭所なり又山腹に馬鬃とあり所より畦植大谷吉苗慈明寺山

大窪四條小堂あり氏神といふ毎年二月朔日霜月初子日撰例住吉社より拾宜二人侍二人擔一人

住吉神社植使

右より如く毎年兩度あり此日當地大々賑ひて祭祀と

撰例一宮住吉神社二月祈年穀祭十一月新嘗祭此兩度の祭式に當畝火山の

土と取て平瓮と作るに例といふ則ち二月朔日住吉神官の内より初冠乃官

奴一人神職ハオウとて烏帽子持衣と着道條馬乗とて其日に畝火より着て行程

凡十里山の此方より雲梯社に入て袈束成改む麓の神館と旅宿と一泊翌早

天山に登ると土と取る其時に賢木葉を食身と清む住古より土と取ると

定よりて周玉垣を構へ又あり神井より水極めて清冷なり是れ神代乃

天の真名井なり此靈水を汲んで手と清り土と取る山中に榊樹多し生

ぜり此枝と折て植土の器とて住吉に飯る十月初子日又斯の如く抑植土と

攝州任古神社
塩使

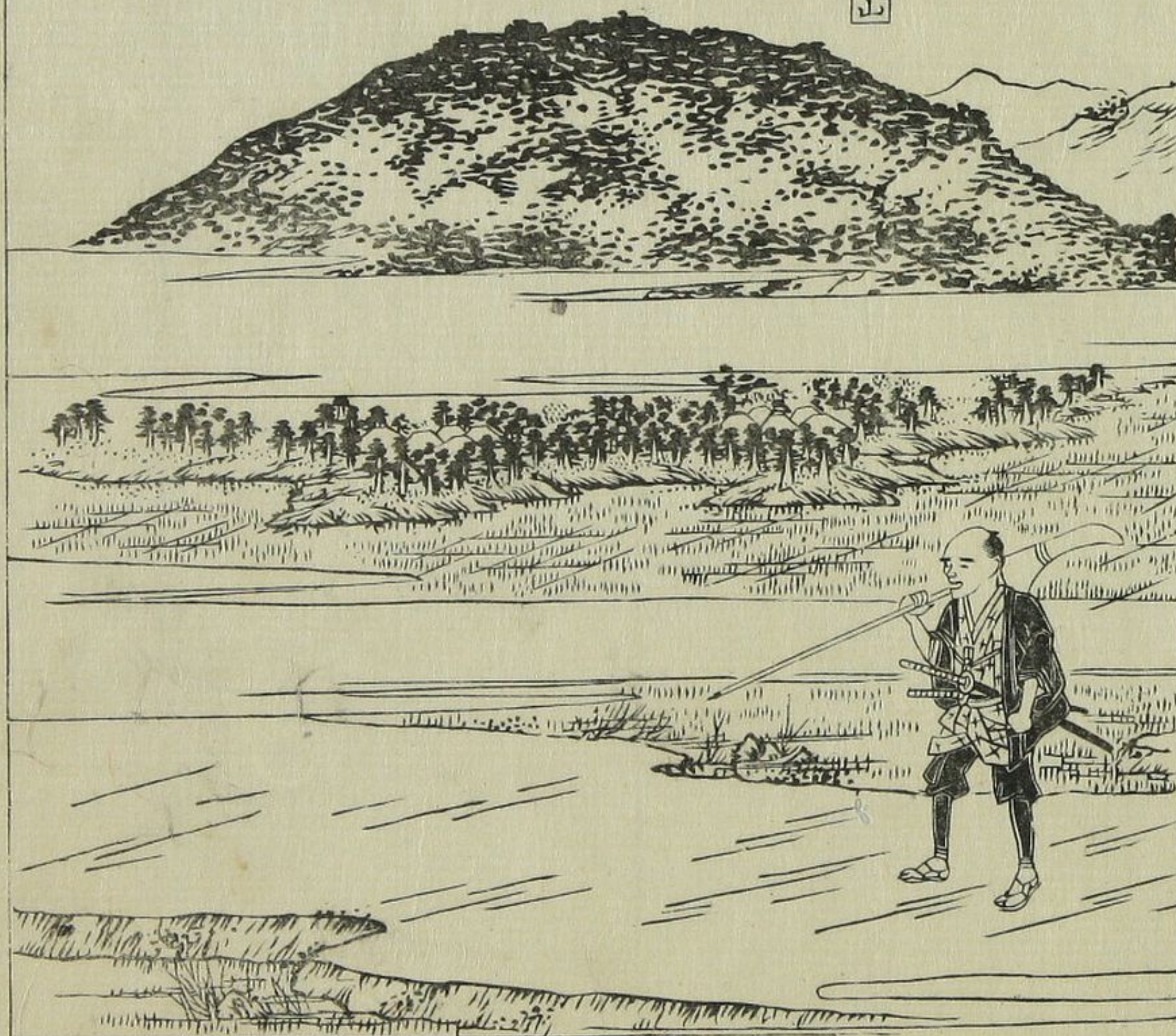
任古年中行事曰
二月四日早且両官出仕
并大神成尅四社神供
備進祈年穀之祭也
十一月卯之日新嘗會
早且両官社参成尅社
祭神供備進云

右兩度の祭祀に用る
平糶の料と神火山の
土を取事例あり
これと塩使と同一



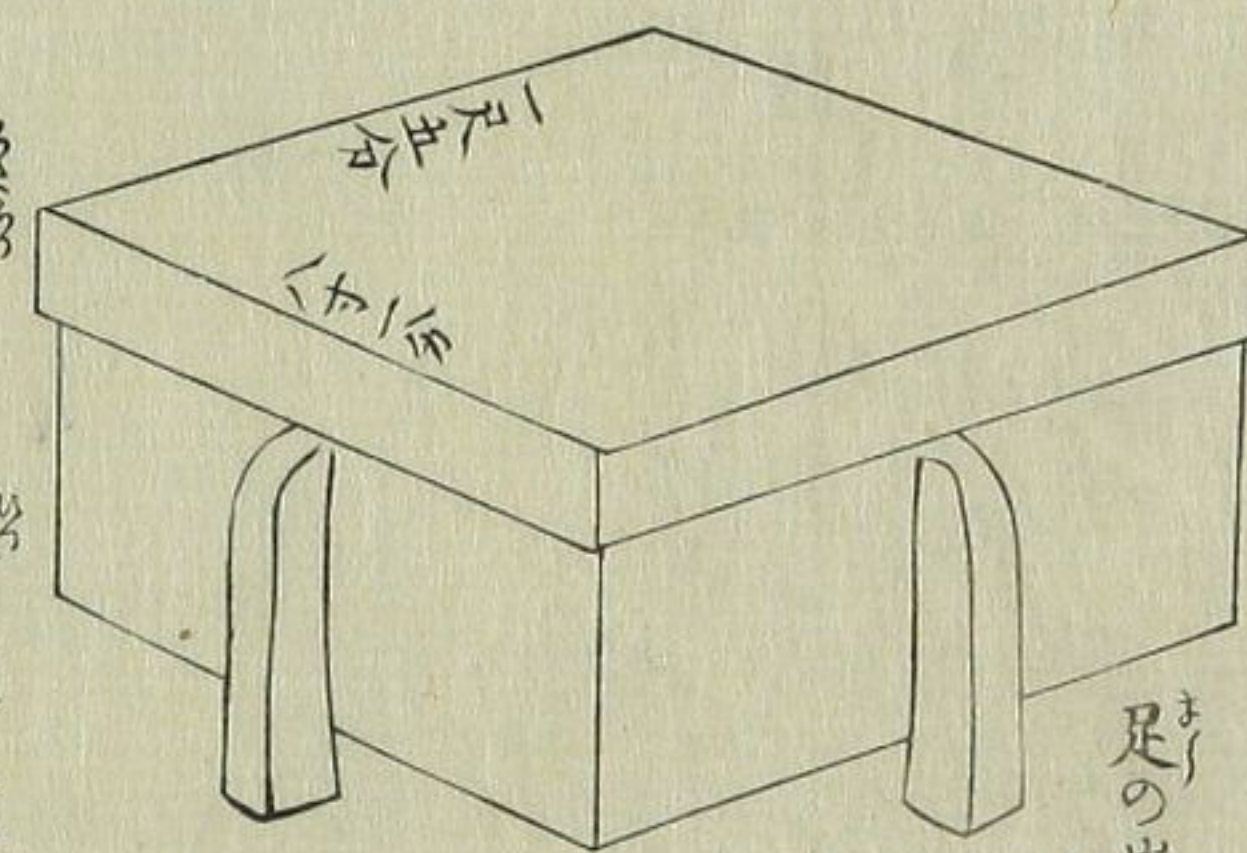
塩の使、神火の此方
雲梯村、葦の森の宮、
やすし、装束、
改め、今、山、の、簾、
大谷村、おつゝ、
故、一、萱、の、森、の、宮、と
俗、一、装束、の、宮、と、いふ

神火山



取る監觴日本紀に神武天皇天香久山の埴土より八十平瓮成目造り
あつて諸神と祭る天下と溢りさせり其土取らるる埴土より
見たりむ昔天香山より土よりり今八畝火山より取を例とす

○土納る
唐櫃の図

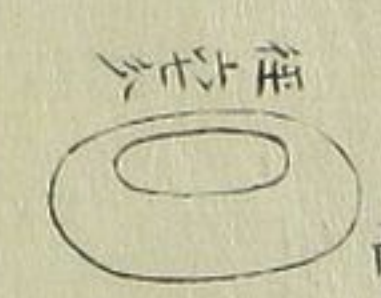


足の出寸

又、荷の唐櫃に入

是土を納りて
又、荷の唐櫃に入
擔ひく

○天平瓮の図



高サ三分

○嘗社の神官八西の麓大谷村に埴土使は是より峯より也

蓋深二寸 櫃の高六寸二分

都合其數四十八
右兩衣の袷式を用ひて
九十六枚作

御陵山

山本村にあり畝火山の北麓に神八井耳命の墓と小祠あり
綏靖天皇兄とす

日本紀曰綏靖天皇四年夏四月神八井耳命薨即葬于畝傍山北

綏靖天皇陵

徳明寺村東南にあり字水山に綏靖の神と云ふ山の堅横あり二十回余高凡こ
間山の根より九十八回余徳明寺の陵と云ふ

前王廟陵記曰桃花鳥田丘上陵葛城高丘宮御宇綏靖天皇

在太皇國高市郡北域東西一町南北一町守戸五烟 諸陵式

桃花鳥田丘俗云鳥田丘在久米寺成史

安寧天皇陵

吉田村より畝火山の西南にあり物山の廻り百十回余間御祠廟あり御蔭井よりハ
丘の下切岸の傍にあり例年九月十二日神事ありと云

日本紀曰大日本彥耜天皇元年秋八月丙午朔葬

磯城津彦玉手看天皇於畝傍山南御蔭井上陵

延喜諸陵式云畝傍山西南御蔭井上陵丘塩穴宮御宇

安寧天皇在大和國高市郡北域東西二町南北三町守戸五烟

天満山長法寺

常門村にあり本尊大日如来池中の觀音堂ハ此所の觀世音と安置地蔵
尊の十餘堂ハ池の傍にあり鎮守熊野權現の社ハ本堂の傍山の方より

十二重石塔

本堂の左の向山の方より寺僧曰先年此地野火を石塔の倒る時地中より經卷軸
の存鏡一面金佛三尊長寸より三尊の除胎と云ふもの出り余後又埋むと云

同村より打鳥の社と云
 神名帳に代實録あり出

根成柿村にあり當村の生土神として境内廣く
社前の右に石燈籠あり建武二年卜刻に長凡う八寸許

雲梯村にあり今川股八子ト称ス神名帳及び三代實錄に出
右矢和名所國會に著けり所なり然るも今川股八子ト云

ニテ所^り村の東^につと^て萱^の森の天神宮ト称^し村の南にあるを富士権現と称^し兩社つづ^きなるを伴^り尚考^ふべし又此萱の森の宮ハ摂州住吉より二月霜月兩度埴土使^とて例年畝^一大山に至る毎^に此宮ニ休^むらひ装束^をと改む是より俗ハ將装束の宮と称^し又雲撈^の社と^り事^を萬葉集に出^づ故^に此^を尋^ねるに森ハ名宮の森兩所の^にて餘^り

右両社の森の事もズー奇ム、真鳥すむと旅せんばつゝへ大ある森にて有ーあゝん
今へ両所ともいふと森にて驚のすむとつゝも見へ

萬葉
同
まゐるまむ神名も乃神社の根と衣をたけ付拔せん界かも
想ひぬと想ふと云ひまゐるすむうかゝの社神一あゝさん

畧解云真鳥ハ鷺あり雲撈ハ大和高市郡雲撈と云々神さびく社にて鷺の住吏に何と云々

忌部村にあり 神名帳あり びこ代實録に出

忌部村より四丁余北蘆我村よりあり水上へ越智より所々徳町の川落合いまであられて蘆我川より此川に橋ありて永々歩一無銭の定りと標石と建

萬葉
志茂吉宗 我の川系に傳ふるはなり 吾々と君とありて
類聚國史萬葉集おハ宗我とありて 猶と宗と通ひ用ゐるや 此地ハ猶我の臣の家地
とありて

西八ノ二十四

曾我村より今高市八幡より神名帳より二代實錄より出

萬代
あまのこはきこをきりけりて市のあまの月とゆめを

同村より今入鹿宮と称し神名帳にも二代實録に出
 猶我川の往来より十丁より北よりあり猶我大明神と称し

又此傍に古墳七所あり土人曰舊我山田麻呂主従の墓ありとを農民りやうつとこれと犯せむとち
たりといふとて舊我倉山田麻呂、弟日向を誘言いふとて山田寺におめて自殺し死す者八人その外刑
罪せし者二十四人もあり山田麻呂が忠切むとて、後行ひ誘言の事なりとて帝もあしきせしむるに日本
紀に見えこれに葬まるといふのあしきなり

曲川村にあり人皇二十八代安閑天皇の皇居の地あり勾金橋宮と云ふ日本紀に
 勾と云曲と書て又曲川と畧記に

日本紀曰安閑^{アンカン}天皇元年春正月遷^{ウツス}都^{ミコト}于大倭^{ヤマト}國^{クニ}勾^{フクリ}金^{カネ}橋^{ハシ}

因為宮號云云 二年夏四月丁丑朔置勾フナ舍人トナリ部フナ勾フナ鞞フナ

部ラ一云云

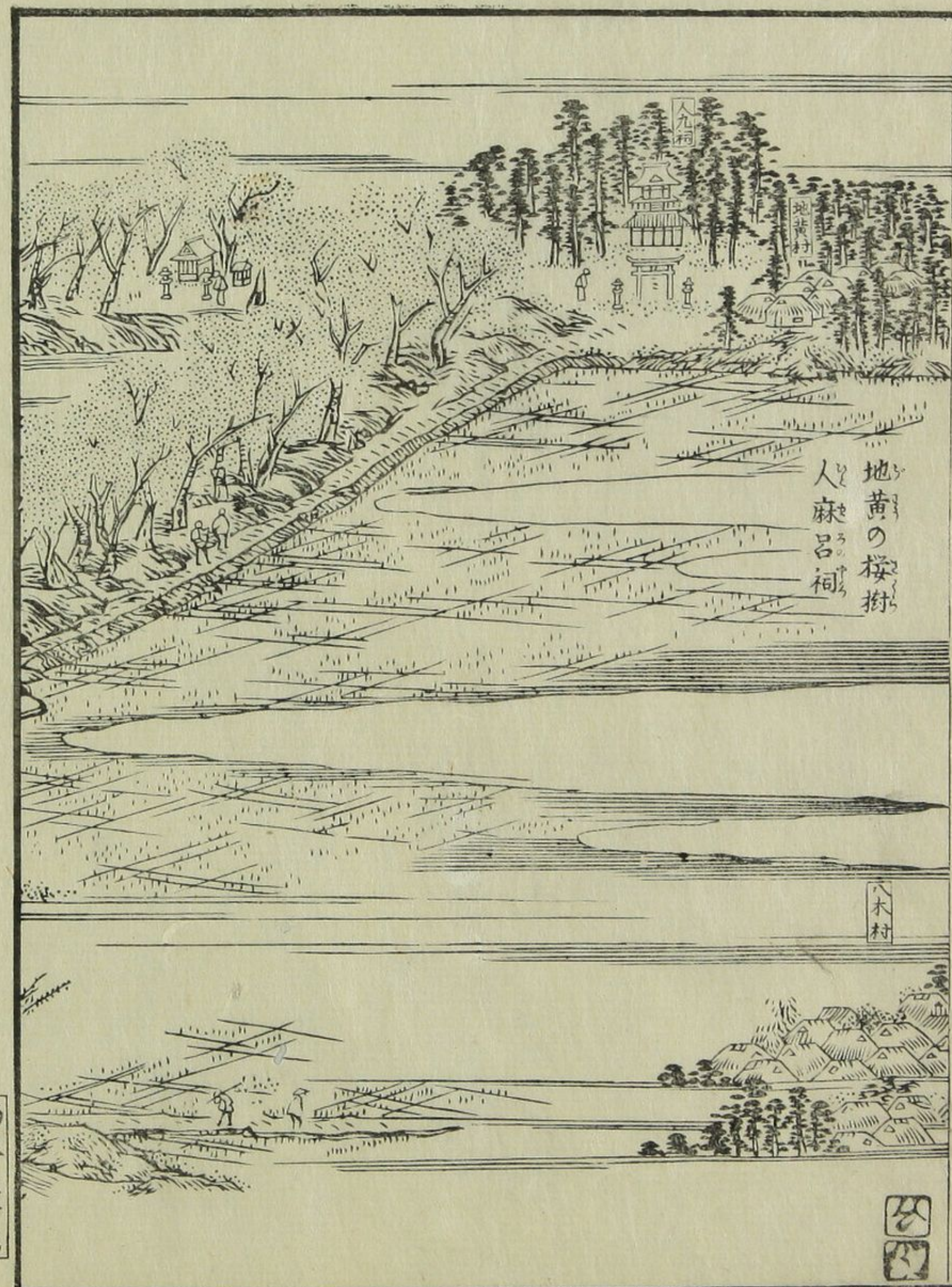
○此曾我曲川ハ高田よりハ木初瀬ひゞる街道ん

同村にあり親鸞上人旧跡之

中曾司村より中曾司松塚土庫ホニケ村の生土神と祭る。又、神武天皇あり神宮寺本尊、善光寺如來あり。弘法大師と安置。社頭境内すて松林より風景あり。神武天皇の御宇と

神曰本船余彦天皇とすべし奉る也之當社と
磐余の宮と号し

小綱村より、街道に於て傍の當村に凡そ一村ともに、籠細の職を営む店を建てて何處あり
生主神の社と守護に
又ハ諸方に於て賣と渡せし故小綱籠細の名高し



本尊 大日如来 聖徳太子作 十一面觀世音 同檀安置

子安地藏菩薩 弘法大師 同安置

入鹿宮 本堂の左の向に傳云我入鹿の靈を祭る當村の生土神

一幸當社と修禊の事ありてす成就せし遷宮の祭祀を執行するに瀧澤寺の坊中善住院の老僧と請招にありて老僧が至る其神籬と納むに其其を

其寶白 馬祖大師にたれ寶と満水に泥り阿彌居士が娘あり

按靈照女阿彌居士の女にて帝竹橋離と製しある靈とて活業とて郷那代醉編り

人麻呂祠

地黃村より神本大明神の額を掲げたる池あり此周は数株の桜樹とて花の

義作池

和漢三才圖會云 和州高市郡地黃村相傳往昔始出地黃之處云

堀川次郎百首

そちのいひごとくやとて海大わらうて又作の池

忠房

蘇武川

蘇武橋

八木村より飛鳥川のわたり王林抄曰聖徳太子斑鳩宮よりすらとて

國分寺

倭路記

南八木村より延喜式云此地は街道の南より高市郡に属し

耳梨山

懷中抄

耳成耳無あり作木魚村の上の方より四面田野より孤峯林然り山中はちの樹多し

耳無川

耳の東の林とて寺川より目無川とも

耳無池

六帖

目耳川耳の川のなびたけりて人々を悩ます

耳無池

今承りて其名のなり

萬葉集曰 女より名を髪兒と云

耳無池

今承りて其名のなり

男二人と恋ありて女をせんと思ふ我身は川

耳無池

今承りて其名のなり

瀧の露もも軽し二人の男のちと和子かたはるのて終に此地より身

耳無池

今承りて其名のなり

とぞちとて二人の男あはれとて絶ばり

八木の町の札の辻、東、桜井より
泊瀬より、街道南、圓寺、高取
吉野、木の辻より、西、高田より
竹内、當麻の往還、北、内原より、
奈良、良郡山の通路より、四方
往返の十字街、もれば、晴雨暑寒を
いよいよ、冬、生に、旅人、可、断、り、く
至つて、賑、り、毎、朝、札、場、の、傍、り
ち、つ、魚、市、の、り、此、邊、の、り、ま、も
旅、駕、屋、に、て、家、依、り、り、く、
端、麗、な、れ、伊、勢、系、宮、の、陽、氣、連、
駕、と、ん、な、大、和、巡、り、西、掛、り、を、し
西、国、順、禮、も、ん、と、日、の、高、き、を、言、ひ、て
ろ、に、宿、る、所、相、近、隣、り、も、て、の
御、事、花、あり



同 同

耳の池ーくも日なりみきく溜るふみハ固む舞
 足曳のふくくの児くあく我く告せばゆりあくー我
 ちーびね

耳無山にちう新賀北八木石倉常盤葛本山坊木の氏神と
神名帳あるに三代實錄出

山の西麓木原村其四址ありと云々推古天皇
九年五月行幸と日本紀に見えり

耳無山の西北より

大吏

秋^{あき}ももつねとてその里^{さと}人^{びと}はたゞもや^もや^やな^なつらん
来^こぬ^ぬ人^{ひと}と傳^{つた}へ^へし海^{うみ}乃^のね^ねた^たる^るが同^{どう}じ常^{じょう}盤^{ばん}は里^{さと}ぞうれ^れぬ

法眼善孝

按て撰集に出る所常盤山常盤社とてゝゝ奇多し是ハ山城國なり

東竹田村より神武天皇八十梟師を滅びしより官軍と立結し所と
神武紀曰皇師立結之處是謂猛里也云

右同村より今二十八所社と稱し
 神名帳と出

大福村より往來する六丁より北より田圃の中に周凡十二間許小高き塚のてくれ覆樹一本生茂まう俗に字と神の本と云

日本紀曰橘豐日天皇卽二年夏四月乙巳朔癸丑天皇崩

千大殿七月甲戌朔甲午葬于磐余池上陵云

豐御食炊屋姫天皇雄元年秋九月改葬橘豐日天皇於

河内磯長陵云

按磐余池上之陵に葬るる有、則ち此殯葬の地ありん磐余は是より南にありて池内村と云ふ

芥摘妃古址 膳夫村にあり街道の南あり傳云む聖德太子の妃其始めやの賤女と云ふ芥摘と云ふ

吉備公別業古址 吉備村にあり街道より南四丁あり教材の中其古址あり

磐余麿栗宮舊址 池内郡厨子邑より一人皇孫三代清寧天皇より即位し

磐余雅櫻宮舊址 池内村にあり神功皇后二年春二月磐余に都一の是と雅櫻宮と云ふ

磐余市磯池古址 又十八代履中天皇も此より即位し日本紀に見たり

磐余池 履中天皇二年冬十一月此池より西行舟と云ふ遊宴し人にて時あり桜の花の散ちたり

日本紀曰履中天皇二年冬十一月作磐余池云

萬葉

百傳磐余乃此より鴨と云ふ今日のと云ふ雲かりしむ

磐余野 右に同勅撰名所類字名所より十市郡有古歌多

大津皇子

石原西の宮の
街道の正中有
幹のすより
凡二丈余

規の
大樹



土舞臺

長門村より高き丘にて平地あり今大生茂り其地形も定まりて土舞臺の名に存せり此地は初瀬道三王宮村より南安部の方へ傍に

途要抄曰く輪山の南接井村より所々土舞臺の跡ありといふ
推古天皇二十二年百濟國より味摩之より人來朝し曰く吾國に學びて伎樂の舞成
得たりし則ち勅して接井にありて幼童とありて伎樂舞成習ひて是よりして真野前
子新漢文より習傳し日本紀に見えり
則ち此土舞臺といふ其傳し習ひて古跡ありといふ

阿部山崇敬寺智足院

阿部村より真言宗本堂南面
創年正月廿五日文殊大士の大會式より遊遊より群衆より賑ひ
飛鳥より直に初瀬よりこれより出る

本尊

文殊大士

長九尺 安阿弥作

御影堂

本堂の前の傍より
弘法大師と安れ
本堂の左の後より

御供所

大師堂の
左より
本堂の右の傍
池の向より

關伽井

岩屋より半丁斗魚より本尊大日如來

口岩窟

本堂の左の向より
石不動と安れ
八尺五寸許 高廿尺余 奥行二尺五寸許

大日堂

岩屋より半丁斗魚より本尊大日如來

奥岩窟

大日堂の左の後より
石不動明王と安れ
山中より

鎮守白山權現社

大日堂の左の上の方より
前小拜殿あり西面
例祭九月廿一日

當山八人皇二十代孝德天皇大化年中の草創より本尊文殊大士昔

空中に光りて山川大震動 石窟に物の落る音ありといふ

是と見え量壹寸八分の黄金の文珠の靈像なり其温る事人の膚に

と即ちそれと感得して此地に安置し後に安阿弥と仰せて佛量九尺の像

と造らしめ彼靈像成眉間に彫龍より尚それより利生夜より新と効驗

日に弥増せり奥州永井丹州切門和州安倍山とまて本朝に文珠大士と

遠近の諸人渴仰せし事なり其始り大日如來と本尊と次今

の大日堂これあり文珠堂ハ別院として満願堂と号し文珠の尊像降臨南

石窟ハ本堂の裏ありとて則ち口石窟あり中興の関基運覺沙門豊後國

の人なり承暦二年安倍山に草室を構へ前非成りといふ頭密とあり

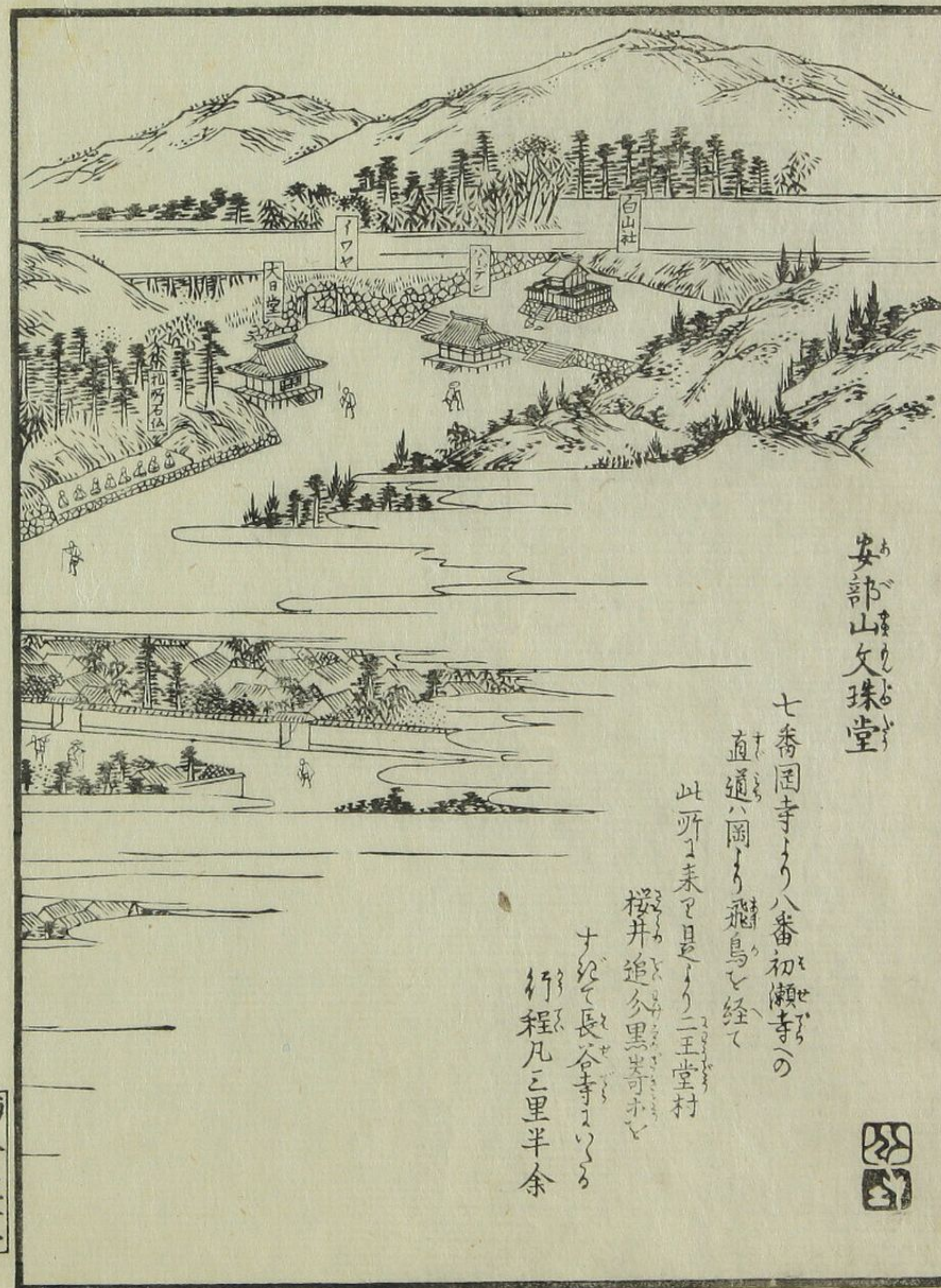
保延六年衆僧とともに佛號と稱へて彌陀と瞻仰して暫くも目とる

とて終に端居して入寂せり其後二十七日を経るも印手更に乱る遺言

に隨ひて佛堂の下に納めり肉身壞るに今に至つて存れり壽齡九十一

なり當安部の峯修行精進の區にありて御運覺の力許多加ふる

故ありと委々釋書に見えり



安部山文珠堂

七番園寺より八番初瀬寺の
直道八箇より飛鳥を経て
此所より東へ是より二王堂村
桜井追分黒岩寺あり
ナレ長谷寺あり
行程凡三里半余



荒墓

同山中にあり土人晴明の石窟といふ是は安部といふより晴明と附會せらるる

高口より六尺余

奥より七尺五寸許
内なる横より正しく高位の人の
墳墓あり後の方墳まで内より二
見ゆりつゝも空棺あり土人の田舎
賊らうてかゝのてゝ石棺を壊ち宝を
棄けりといふ

石棺 惣高五尺四寸五分余
竪七尺八寸余
横四尺七寸許

七ツ井

安部村にあり七所は湧騰
田畠にそそぐ傍に二井を生れ

萩田寺古跡

安部の南 香味地異なり
萩田村にあり

一名本願寺といふ長和三年多武峯の
僧聖昭の建立ありト多武峯史略に云

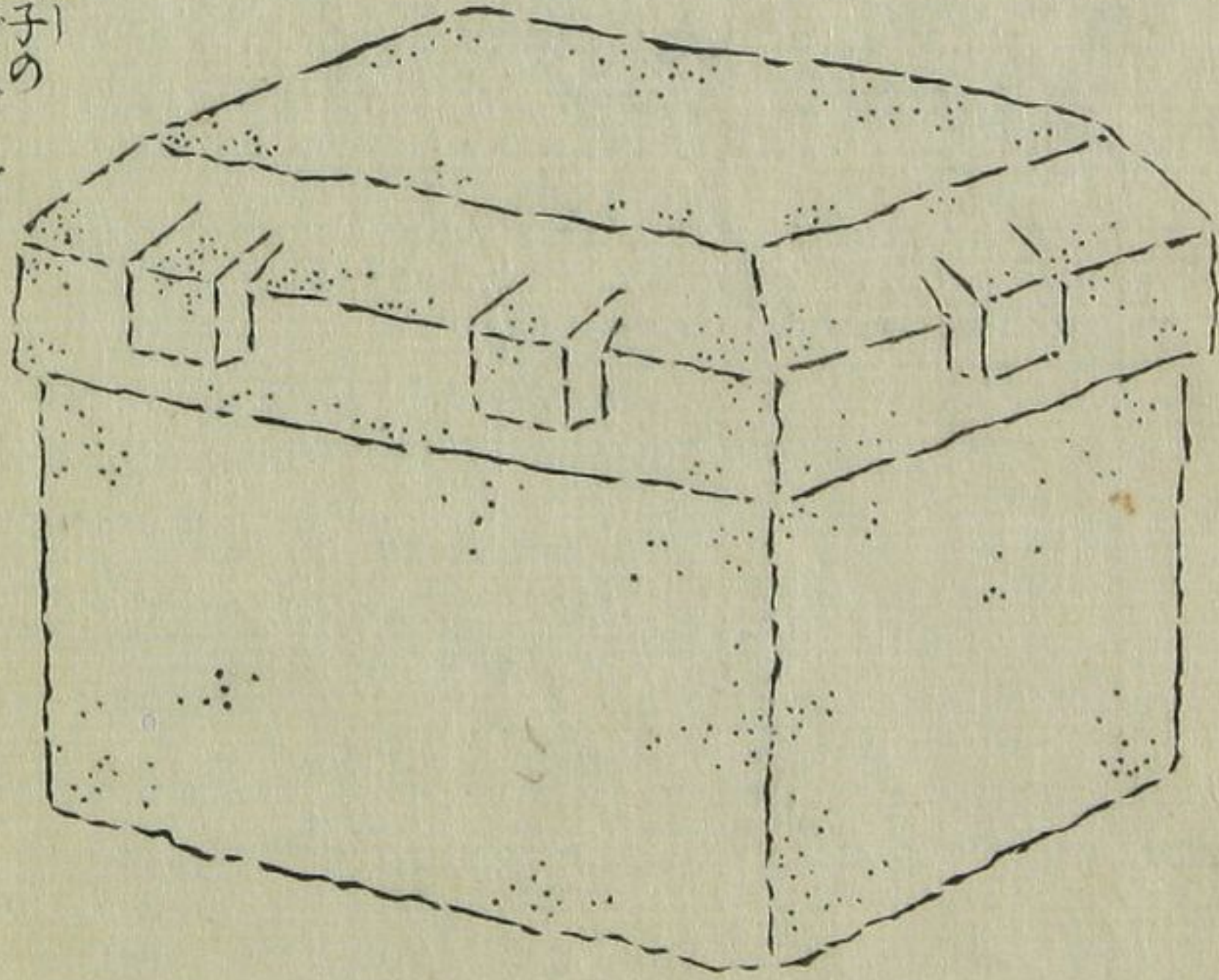
上宮古趾

上の宮村の地ありといふむ上宮太子の
住のいし所なり其後寺となりて上宮寺といふ

上宮寺の額に後鳥羽院の宸筆ありて今上宮村に傳へ下開か
是より多武峯の東口鳥居の辺に出入り倉橋に至る則ち倉橋多武峯東口の參詣道に

天皇屋鋪

倉橋の村中より今金福寺といふ寺ありて傍に小堂一宇あり堂内に厨子ありて
中に尊牌を納む其造形りつゝも美麗あり



尊牌堂

一間半面より南向
金福寺の本堂あり
對して北に向ふ

牌向日

聖德太子 尊儀

崇峻天皇 尊儀
惣金福寺より中央に棚を設け其土着
左に不動尊 右に觀世音とを
當寺本尊は榮師如來と本堂の

右の傍に塔の形を形つゝるるなり其大サ
玄二尺一寸余横二尺五寸余あり

右天皇屋鋪と云ふ地所凡東西十五間許
南北十八間許其境目より右に云ふ

右此地は崇峻天皇の御倉橋宮
又倉橋都宮又續紀に倉橋の離宮ありと云ふ

崇峻天皇陵

倉橋忍坂西村之會の地にあり倉橋村より十八丁許良いり忍坂村まで此陵あり
七丁半ありり倉橋十市郡忍坂城上郡之俗此陵を岩屋山又赤坂山ト云

惣山の根廻り凡八十余間山の高サ十余間山二段あり其難木生えり中段南の方の洞の石あり興行凡
八間余奥の方より廣二間半余の所切石に置あり其所は長九尺余横五尺余高サ四尺余の石棺あり
崇峻天皇は倉橋の宮に御中より五年冬十月延臣藤我馬子に謀計ありて東漢の直駒のふれ
弑せりといふ日本紀に見ゆ

諸陵式田倉橋岡陵倉橋宮寺宇崇峻天皇在大和國十市郡

無陵地并陵戸



倉梯山

萬葉

二代實錄曰貞觀十一年秋七月八日甲子大和國十市郡

棕槁山（俗名）河岸崩裂高二丈深一丈二尺其中有鏡一廣一

尺七寸採而獻之

掠擣川

水原ミヅハラ八尋武峯ハツミツタケノミネ音羽山フナトヤマより出て、乾カラに流ながる城上郡シロノカミノより入

檣さか之の倉くら椅い川がわ石いし走はし者もの裳もも壯と子こ時とき我われ度ど為なり石いし走はし者もの裳もも

不編川靜萱

下居原

丁居村ありと云崇峻天皇倉掾は皇居とつとせしむ是と倉橋宮より此所へとて山の下居ありといふ所なりとて延つて四季にあらはれて淑賢のうらもぞ見えて此地ハ倉掾村より五丁町を経て多武峯に至る

七表抄に見たり此地ハ倉掾村より五ノ町を経て夏武火に至る
東(ちやう)

下居神社

下村あり神名帳三代實錄と出
近隣四ヶ村の生土神といふ

若櫻神社

按井の名邑より今白山権現と称す 神名帳と出

高屋安倍神社

同若狹宮の傍にあり今高屋明神と稱し神名帳にびに代實錄出
むうハ安倍松本山にありと後世ちり遷はるなり

等彌神社

桜井の谷邑の南にあり今熊登祠と云

東光寺

接井村より往古ハ磐余堂又接井寺ト号シ大永天正の頃接井掃部介延久ト云ハ人の
薬師佛の靈夢ト云フ東方より光明赫々ト云フ所東光寺ト改むト云

委しく、當寺の縁紀に見えり

是より十市郡也

當桒井ハ木ノ初瀬ノ岡寺ニ飛鳥安部を経て長谷に至る此地ニ少シノ順路ナリ又
是ノ右ニ行ク武峯ノ東只ノ左ニ行ク奈良街道あれば平明ニ往還の旅人志けく右海濱の
右郷ノ此里に来つく諸邑を求むる故ハ商家軒をなく交易一月に六度ノ市をなす至つて
あきハ是ノ長谷といふ外山村追分 腰本 黒崎 出雲也

宗像神社

外山村あり今春日と移入 神名帳ありびこ代實録と出
是より城上郡也

跡見庄

今の外山村よりむろりへ、鶏村よりと、後、鳥見又跡見に作る又本の名ハ長隨よりと
鶏より号けり、日本紀に見えり

神武天皇戊午年冬十二月皇師遂に長髓彦と殊伐の時此地に戦ひ長髓

彦連ひこきに戦いくさふより皇師勝みけんて能あたに時ときは忽然天陰てんいんて雨氷ひこりふ且金色きんいろに

靈鷲りゆうじゆの飛と來きたつて帝王ていおうの御弓みゆみの弭やみ止とどまろ。其鷁そのう光曄ひかりはつ暉きて流雷りゅうらいのに

是よりて敵軍卒迷ひ眩て復び力戦する能は皇師進んで大に敵滅

敗^くて長髓彦^{ちやうまゐりひこ}を斬^きる是^{こゝ}を緒虜^{おろ}ありとぞ皇師^{みくにのみへ}の属^{そと}し和州^{わしゅう}皆王化^{みくにのまじは}し服^{うけ}す長

跡見岳

又日本紀 神武天皇孟春二月靈野と鳥見の山中に立ちてつゝ此地あり
萬葉 親良布亦見山雪之杓然意者妹名人乎可聞

窺良布跡見山雪之灼然愆者妹名人將知可聞

射目いり而て跡見あとみ乃の岳邊やまべ之の瞿麥花しんぷくはな総手そうて折をり吾者われ持將もつ去い寧樂人ねいらくじん之の為ため

又紀朝臣鹿人跡見の茂岡の松と縁る哥あり此茂岡と云ふも
跡見の岡の事かズ
跡見橋 同村にあり恩坂川
と云る

恩坂山

忍坂村の
東より
恩坂川
水源十市郡栗原山より出て忍坂外山を経て川合に
なりき川なり

舒明天皇陵

塚穴の石を見長サ一間より中四入余の石より往昔石の下廣く口ひらけて雜人より入込一故
今もまじと埋むる人曼と押坂内陵よりやぞ

諸陵式曰押ヲ坂サカ内ノ陵ノ高市岡本宮御宇舒明天皇在大和國

城上郡兆域東西九町南北六町陵戸三烟

押坂ハ恩坂あり或ハ恩坂ニ作る多ク
前王陵廟記

西
八ノ三十四

田村皇女墓

敏達天皇の皇女糠手姫皇女
も申奉る

大伴皇女墓

鏡女王墓

右之墓さんがもに舒明天皇すめみかどの陵域内らういきのうちにに在あり延喜諸陵式えんぎしよらうしきに見みえり

恩坂坐生根神社

忍坂村とある神名帳
及び二代實錄に出
恩坂山口坐神社
赤尾村とあり、今天一神ト移尺
神名帳及び二代實錄に出

玉烈神社

慈恩寺村にあり
神名帳出

慈恩寺廢址

慈恩寺村にあり

追公

俗は慈恩寺村より曼六桜井より長谷とつくと本寺良より二輪を経て長入に至ると兩道の落合より故より号く名所といふが桜井より此所まで凡廿丁許あり此より長谷二里に

泊瀬朝倉宮舊址

黒崎岩坂両村の間より住昔雄略天皇有司（みかど）余（あま）トて壇（だん）と泊瀬朝倉（あさくら）に
ありける天皇御位より即ち故宮と定む

帝王編年以泊瀨朝倉宮城上郡
磐坂谷あり長谷より南井丁許といふ

岩坂井

岩坂村にあり二村
○黒崎村ハ街道として名産
カ漫頭と賣家多し

叢つ嚴つ檀く本り

白川出雲の二村の
四号より
人皇十代崇神天皇四十二年天照太神大和國伊豆加

志本しほんの宮みやにうつりてひて八年祝いわひ奉とこり倭姫わひめ紀

磯城叢書之本も葛木宝書

土人曰むく天照大神とてませぬい鳥居の跡とて長谷の町うち南民屋の内礎ニツらう按ずこ
幾成島ハ半里をくく申は名をも遺まう伊豆毛村ハ十町をくく申はあり伊豆加志本の鳥居の古趾

近世享保年間

泊瀬列城宮

出雲村其跡そのあとと向跡きりきり考かう見みて
人皇二十六ひとみ弋ぎ式しき天皇てんかう即すなはち之これなりなりと定さだめりめり所ところに

日本紀曰小泊瀬雅鵜鷯天皇
烈武
設壇場於泊瀬列城陟



長谷寺より半里あり
此方黒岩村あり
此里の各物とて
饅頭と二ツあり
これと女夫さんちう
とて商人家
今まで味い
女夫さん
柳折亭
翠亭

天皇位遂定都云々

八年冬十二月壬辰朔己亥天皇崩于列城宮

○此雲村長谷にける街道より一村多く各産とて文番扱と商人家あり

第八番 豊山神樂院長谷寺

泊瀬山にあり本堂南向十二間四方

本尊 十二面觀世音

長二丈六尺余

佛師法眼快慶安阿弥作

藥師堂

本堂の左の傍あり
瑠璃光佛と安ん

愛染堂

本堂の左後の上方有
愛染明王と安ん

三神社

愛染堂の
左あり

鐘楼

本堂の左廻廊の上あり

御影堂

本堂の右の傍あり
弘法大師と安ん

筆堂

同上

摩訶羅堂

左の並べ
本堂の左の傍あり

寶藏

獨煥魔堂

本堂の右の後の上方有
煥王と安ん

不動堂

本堂の左の傍あり
大聖不動明王と安ん

經藏

不動堂の
上方有

大煥魔堂

本長谷寺並ふ十王と
安ん并生地藏尊と
安ん

本長谷寺

觀世音と安ん

二層塔

同上大日如来と安ん

本門

金剛神の西像と安ん
山の麓より南に向ふ

登廊

長九十九間
惣瓦葺廊中の下石階あり
春日社司中臣信近建ふと云
安ん并奥に記れ

道明上人塔

大門の内廊下と登る石の傍あり
九重の石の塔あり

藏王堂

二の廊下の右の方より
藏王権

貫之梅

藏王堂の傍より貫之古里の梅
標石と云古歌八奥に記れ

産靈神社

現二休并役行者と安ん
同傍あり

ともひ三百余所の向ふあり

寛範堂の前より

八月日

慈雲山宗蓮寺より浄土宗の

同村にあり

愛

西人三十六

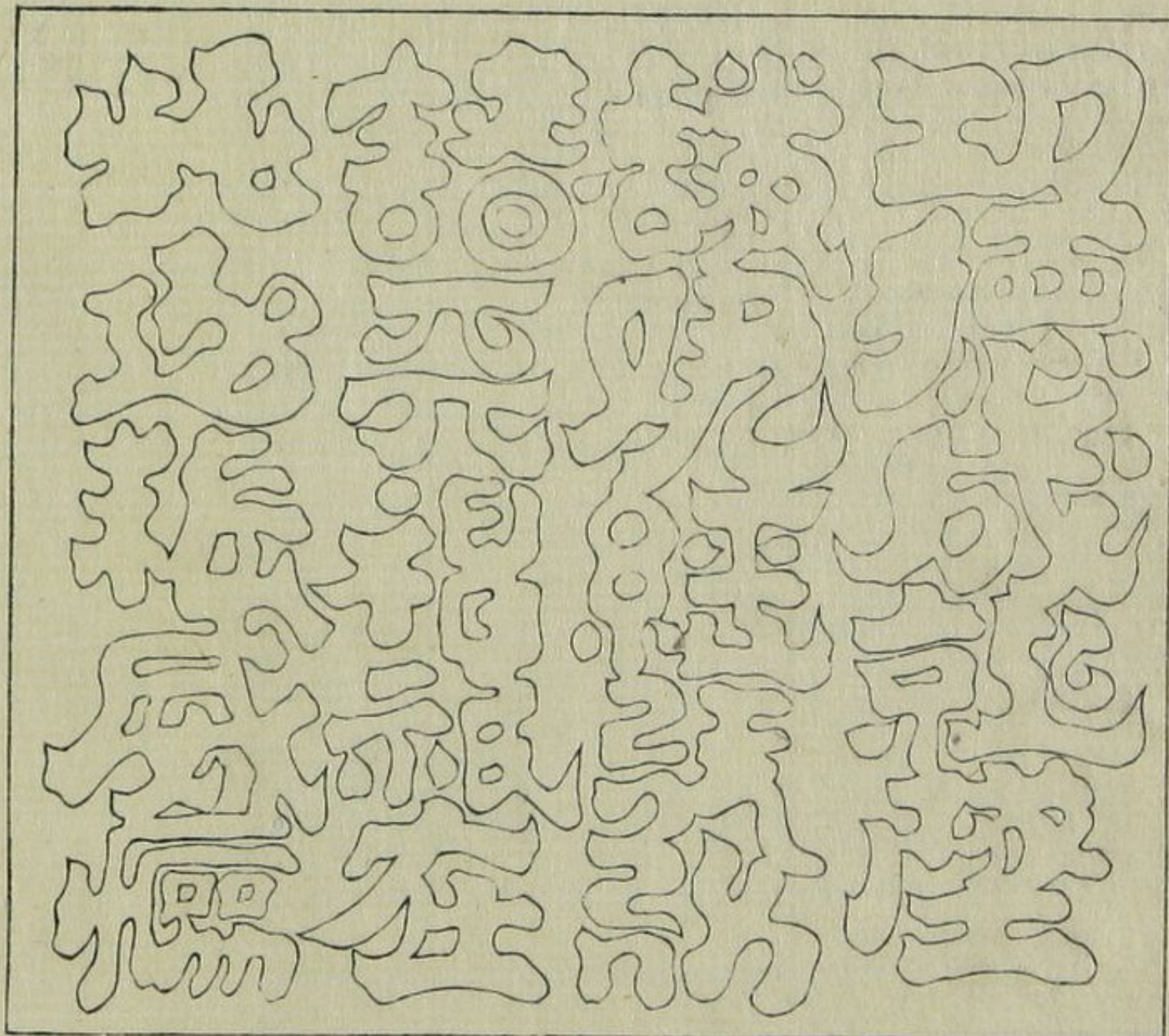
長谷一鳥居額銘文

額銘管公の述作一の
本縁起の中の蔵王権現の
真祠あり

功德成就墜
諸佛經行砌
諸天神祇在
此山振威驗

安井御門跡道信卿
御真蹟

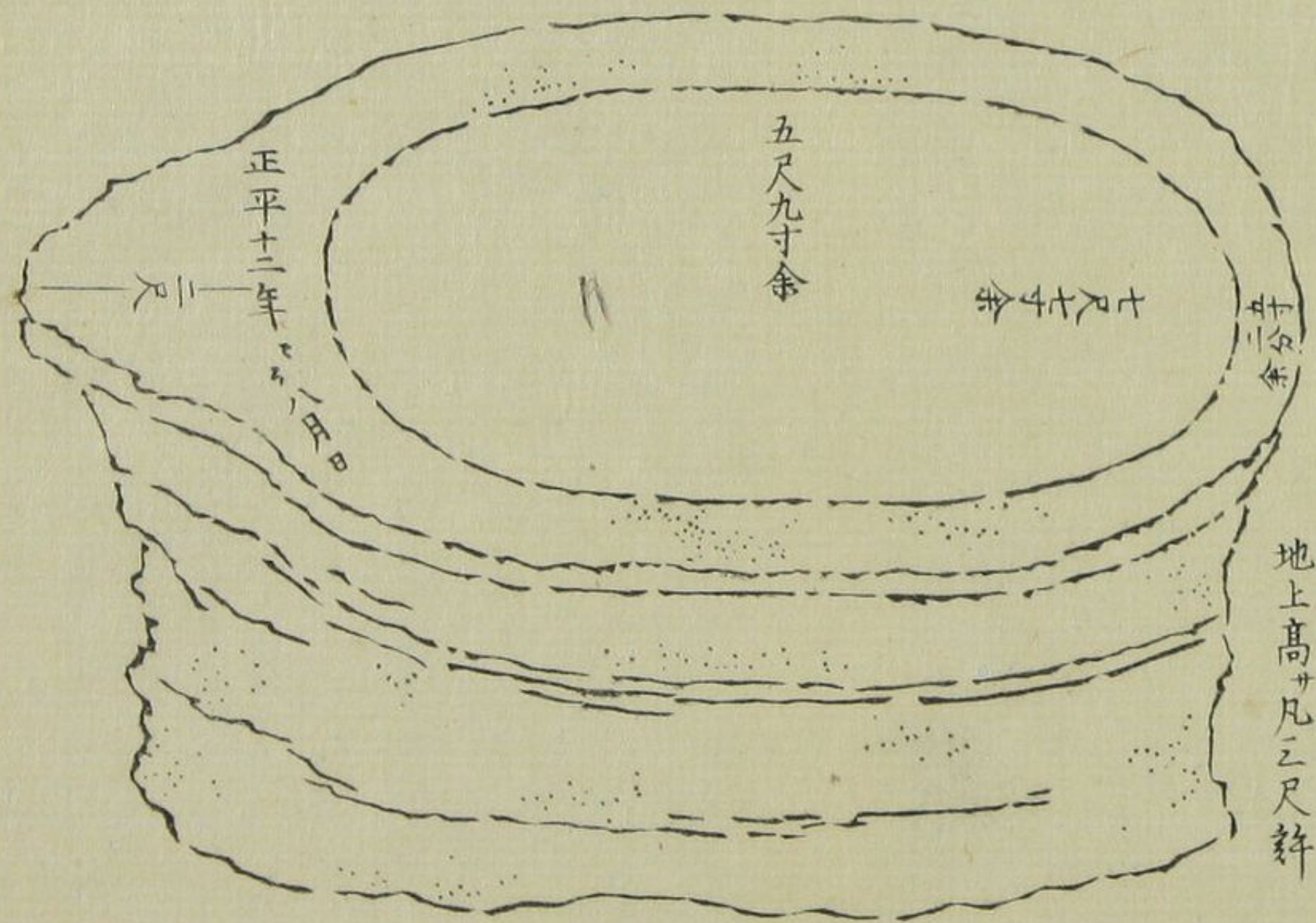
一之鳥居ハ長谷の
町の入口あり
去天保十二年二月廿二日
火災ニ一ツて焼失ハ

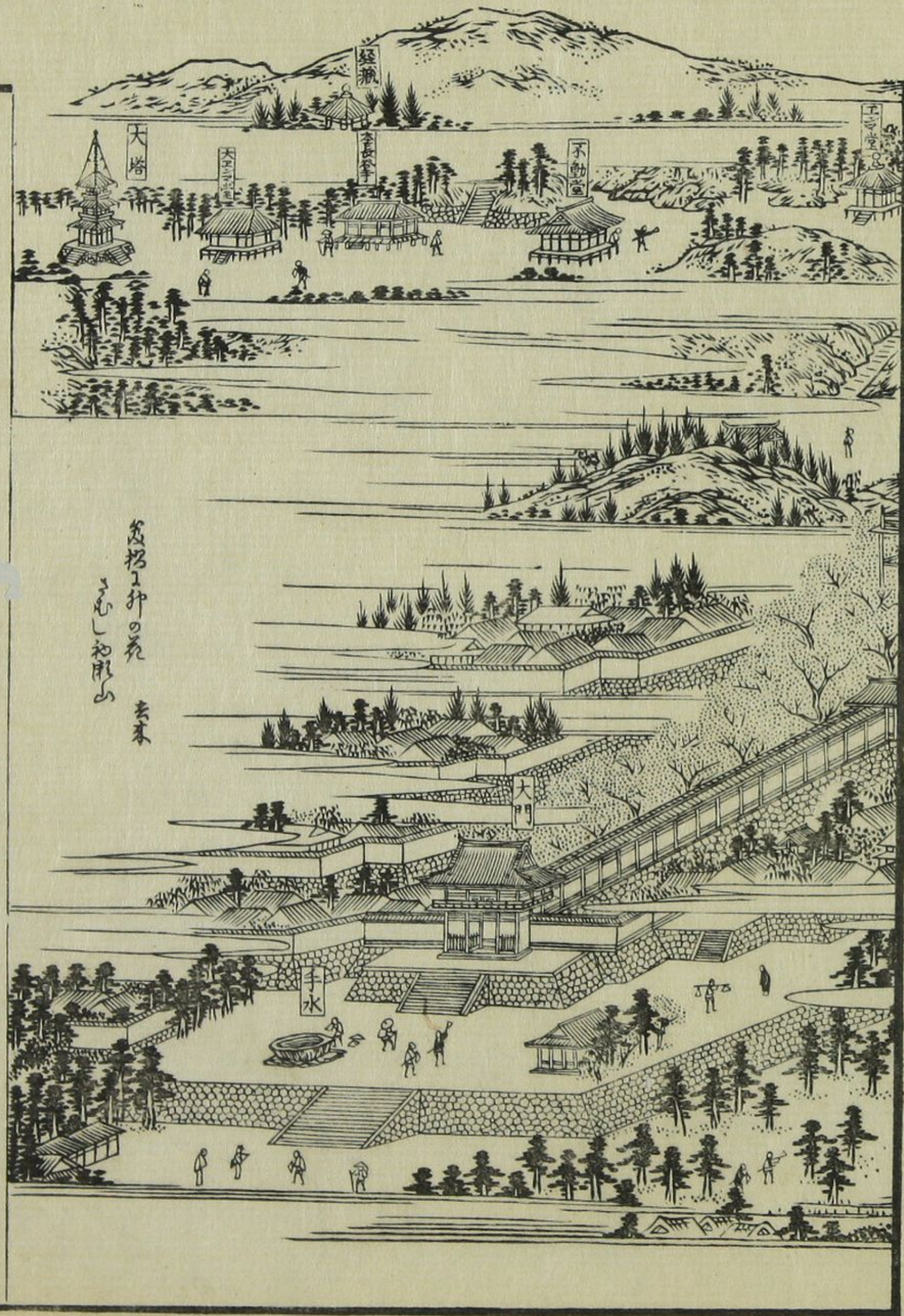


長谷寺大門前
石水盤之図

鑄造ノ所ハ正平十二年ハ
南朝後村上天皇の御宇
北朝崇光天皇延文二年ニ
今テ嘉永九年申年迄
四百九十二年の星霜を経

因云
南朝公卿補任
正平八年癸巳北朝文和二年
六月四日後村上天皇中宮
顯子於長谷寺出家ト云





虎招し押の虎
 さむし初形山
 去来



第八番
 長谷寺

其二

廣濟

地藏堂

例奉土月二箇より十日まで千粒經を誦し七月十日盂の布衣にて修し
十二月九日佛名念修し毎月十七日の辰を法儀にす
地蔵燈塔を万燈のつく

例奉上月二十より十月まで千駄谷に備へ七月十日迄の事いふて候
十二月九日佛名を修り 毎月十七日の夕刻迄に朱に
燈籠灯を二万盞の心

燈籠灯也オカ燈の

真院

地藏堂

あつきまつ雁守
かうぐさのふりて
探ふふりてこれバ
秋風乃もろくにぞう
吹ふて誰のひだれ
そとぞうとれー
岩へたゞとみち
吹くくひ
藤ぞ啼
涼傘

その故に
誰より先
事あり

為良

麦

卷

系りの

五

ち

其东

涼傘

麻を毒

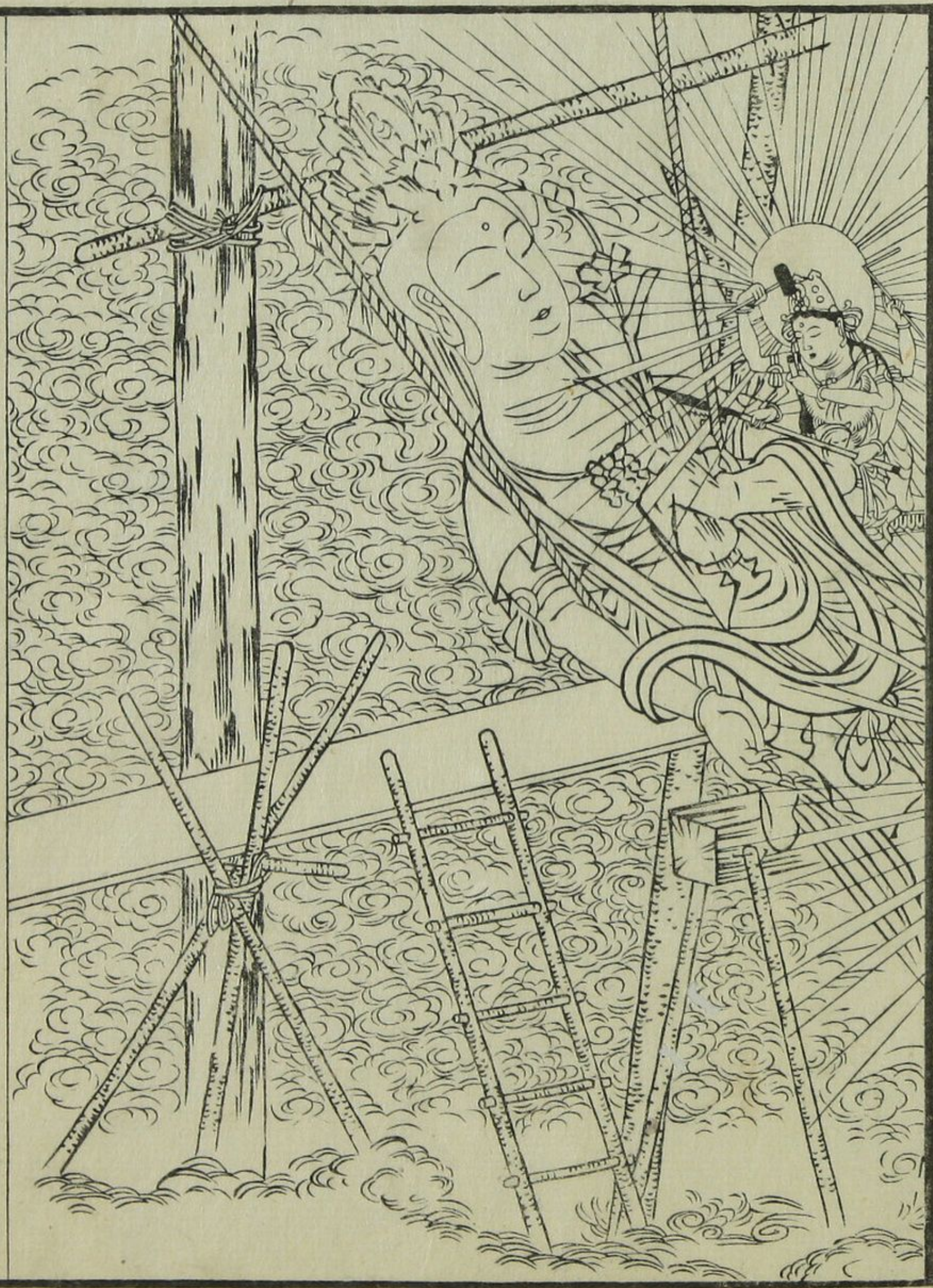
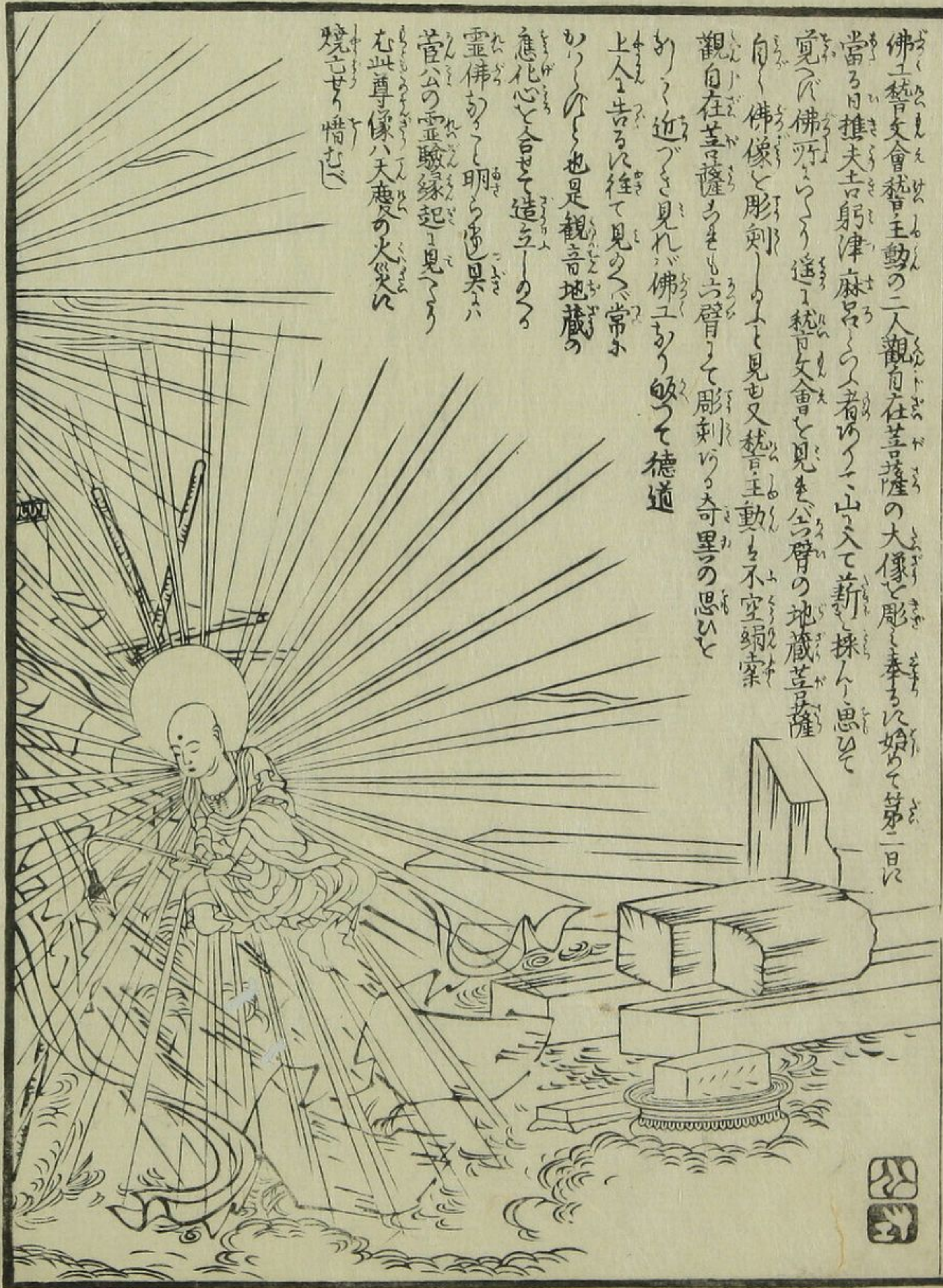
夫當山八皇四十四代元正天皇養老五年小皇創又文武天皇の御時德道
上人あきと造るすもつ本堂八棟作り十二面觀世音の長一丈六尺二五門ハ
南に向いて麓より本堂まで九十余間の登廊ありて其屋の下を階より則
緒堂に登る道して北へ登り東へ轉じ北へ登る廊の左右に牡丹紅躑躅
栽植つゝのなき花の頃の美ありて言緒に絶え山の上八坊舎宇寮終々
ありて薨じありて真言宗より新義の學僧ありて集りて晝夜修行怠慢者
又小池坊ハ往昔紀州根来寺にありて天正十一年秀吉公根来寺を破却乃
後寺僧諸國より流浪しりて後智積院ハ京都に建ち小池坊ハ此地に造
るは是れ講堂と号し西の丘の上の緒堂ハ長谷寺草創の舊地より住古長
谷の河上藏藏推現の社の傍に天人の作ありて毘沙門天ありて雷降り取奉りて
空に登りて時御手の寶塔ありて此山の禁に神の里袖川の瀬に止まりて武内
宿禰とくく取上りてまつて西北の隅に収め奉りて舊名に神を改め
泊瀬の豊山とくく夫より二百余歳を経て弘福寺の道明聖人ありて石室に

うり奉られりる里の名もて泊瀬寺とて文武天皇初と下りいりて彼道
明上人の精舎と造管せられと則今の觀音堂の地ありて後聖武
天皇勅定りて德道上人釈書曰諸人と勸め天平七乙亥年五月十六日上棟同
十九丁亥年九月廿八日に供養せり勅使ハ中納言奈良麻呂道師ハ天竺の僧菩
提咒願師ハ大僧正行基ありてあつ時の瑞應ハ本縁起に見えり當寺縁起曰長谷の國は德
道上人ハ諸國國師也
俗姓ハ辛矢田部ハ米麻呂といはれ基菩薩の應化なり仙人の再誕なり母公教子明里口中に父と夢み十歳に十六
の月と終り生じりて天武天皇即位二年丙辰月廿八日長谷に生じりて父を失ひて母を別れまじりて
因て幼く生る必滅の理を覺て剃髮修業を志し其志の志し四海に名を遠く異域にやう又因縁相成りて此
山に來りて天武天皇即位四年乙亥諸佛法の奥儀とくく修行の驗者ありて修行德業備ふ神龜二年
十二月廿日大僧都に任じりて教書ハ德道上人ハ法道仙人と同人といふ又和州古跡考ハ法道德道道明皆同人といふ
靈驗是鈔ハ人といふ力を合せて建立しりて何んか是なりやと云
抑本寺觀世音菩薩ハ德道上人比丘道明の教順ひて長谷の里に來りて茲に一箇の
靈木あり老翁ありて曰傳聞ある木ハ八皇廿七代繼體天皇即位十一年の供水
に近江國高嶋郡ニ尾前山の谷より流る木あり楠木なりて志賀郡大津乃
長谷寺今天
浦に止まりて七十年と経る其後大和國高市郡八木の里に小井門子といふ女有て
思ふ故りて佛像と造りて彼木ハ木の巷に引せりて事とありて

死せり又此地を年々経る事二十余年同國葛下郡に出雲臣大木沙弥法勢
大満よりあり十二面の像と造り奉りんと同郡當麻の里に引らせりとも大
水も宿意と果さばりて死せり斯て此所を以五十余年と経る其後卅九代天
智天皇の即位七年城上郡長谷の里神河浦に引捨る又此を二十九年と経る
又長谷の川上より年々つるの事彼木の止まりし所毎に火災疫癘の病とあり
又二十五年と過じ有徳通上人の物語に傳へ聞て彼靈木を里人に乞うけ佛像を造
らんと然るも佛像作らんとん糧なくして又十五年と経る時或夜の夢
に東の峯にこの燈あり今三燈の三世利益を表せり彼峯にて造佛とて告
を蒙り覺て後々人のごとく養老四年二月に靈木を東の峯に引のせせて
庵と結び彼木に向ひて毎日念ふに聖朝安穩藤式敏昌乃至法界平等利益
十二面の像と造り奉りんと大慈の弘誓我願いと感得りて此靈木自ら
佛となりて祈りしを成るに元正天皇即位六年七月房前大臣あまら
便り此峯をか入りの庵に奉りて此形勢を見聞し汝君臣と祈る何の願ひ有

ちや聖人答て佛法興廢たゞ君臣にありしと且造佛の大願と審り結るに房前大
臣聞召し此事を元正天皇に奏し重移て聖武天皇に奏し神龜元年二月二日宣下
りて稲三千束と當作の料のいしと成り得ざりしと同六年に至りて
重移て大和河内の兩國數箇年の正税を以てし御衣木の加持あり其修
行に道慈律師あり佛師巧匠六藝智文會誓主勳の二人あり十二面觀自在菩薩長二
丈六尺の大像二日の間に彫り奉る天平五年癸酉五月十八日開眼供養あり導師
八僧正行基咒願ハ義選大徳あり此供養の事には異説あり 教書廿二卷ハ神龜二年二月成説云
同廿八卷ハ神龜四年トあり水鏡ハ神龜二年二月成説ト云
導師咒願師ハ其事供養の夜本尊の眉間より光を放ちありて一夜の間山内
あり金色の光あり本願上人隨喜の涙御衣の袖洩れしたるひて
終夜大悲の咒を持しつと云ふ
○靈像の石座天平元年八月十五日の夜奇異の靈夢ありて土中より金剛宝盤石
の座を出る面平よりてあり大八尺四方ありて自ら足跡の穴あり是
佛像の御足に合せ彫るなり儲りて十二面の像と置奉りて委

佛二替文會替主動の二人觀自在菩薩の大像彫き奉るに始めて第二日に
 當る日推夫吉野津麻呂の人者ありて山に入て新し採り思ひて
 覓る佛所より遙く替文會と見え公臂の地藏菩薩
 自ら佛像と彫刻しりて見ゆ又替主動と不空絹索
 觀自在菩薩もも公臂と彫刻しり奇里の思ひと
 めり近づく見れば佛二あり歎て徳道
 上人を告るに往て見ゆ常ふ
 わりひく也是觀音地藏
 應化心と合せて造るの
 靈佛あり明ら也具ハ
 菅公の靈驗縁起に見ゆ
 此尊像ハ天慶の火災に
 焼亡せり惜む



く本縁起に見る

○登廊建立人皇六十八代後一條院の御宇南都春日の社司中臣信清三國傳紀に
より者の嫡男に信近より者ありて蛇眼疔より人異病成りて人異病と云
首筋のより種物を發し恰も袋に物を入たるごとく種をいつくも首より入
其内に蛇の居るのいつくも醫術外療手とつていつくも更治するの道なり
是にいつくも又信清春日明神に祈禱し奉るに明神靈夢告てのより
初瀬寺に参りて觀音と祈るごとくいつくも信清大に歎ひ此より信近も
はも直に長谷に参りて觀世音に一七日祈誓をうけりて満ちて曉長谷寺の
方より鳥一羽飛来り信近が種物成味と破り内より小蛇と引出し吐く其
より飛さると思ひ一は一夢とて忽ち苦痛やとて種物やぶる膿血を多く出
毒水のより出る種物より愈々おん又子の悦び壁より物より是より
より大患の患と報せんとして石階の上に廊下と建ち居る是参詣の諸人風雨
と凌せんが為あり
當寺驗紀及三國傳紀に見る

○再興 人皇六十二代朱雀院天慶七年正月九日上佛像為灰燼扶桑略傳に見る
大悲の像ハ煙とせりて頂上佛の御より後の山の石の上に飛移りてい

人皇六十六代一條院正暦二年二月二日端堂之上觀音堂右同

人皇六十八代後一條院萬壽二年正月廿七日觀音堂の庇の火はより自り右同

人皇六十九代後朱雀院長暦二年三月十七日長谷寺塔僧房焼亡本寺百鍊抄

人皇七十代後冷泉院永承七年八月廿五日上頂上佛の面梧桐の枝葉の中にかきせり驗記

百鍊抄曰永承七年八月廿五日焼亡觀音像為灰燼

慈鎮錄曰永承七年十月造佛の時佛面と佛身中に納り塗料漆と関白左大臣以下の御奉

加薄の料人皇右官職内親王家法發大僧正と寄附せられ天喜二年八月十一日供養の僧師

法發入僧正明尊兄額推少僧都長守

百鍊抄曰天喜二年八月十一日供養長各寺

人皇七十三代堀河院嘉保元年十一月十二日觀音堂經藏鐘樓坊舎焼失次日觀音堂宝室前

の灰の中より老と紋つと二時より人より炭灰とせりて頂上佛面より焼び

在次 當寺驗紀

天喜元年供養の慈鎮錄

人皇八十四代順德院建保七年二月十五日冬上同御宇承久元年四月十七日五月廿日追觀音
像成就に佛師は法眼快慶安阿陀陀佛と号し始灰燼の中に存りて佛額半面左右の掌
あと唐櫃に納り奉るより佛身中に蓋なすより肩間の水晶の内より提提寺の舍利一粒

うるはれは是法阿弥陀佛所持の舍利に應鎮録
 興福寺畧年代記曰弘安二年長谷寺火上貞治二年長谷寺供糧
 明應四年十一月十二日夜長谷寺焼亡同五年八月十五日長谷寺新始多
 當山縁起菅系桐の御神依りて自ら筆と執らせり所より其文圖の中一地势の文
 あるを此に據て出る

上求菩提之山高下化衆生之谷深回神相應之靈場一天無双之勝
 地也玄武磯碁之嶺蘿苔之松緑徃々閑四時之花以送齡貞於萬代
 之春青龍流沙之谷密岳之巖密間々文雲霧之色以運響影於千糸
 之秋朱雀津洞之谷雲霞旋降而織嶂晴之岳觀似澤池掃温勞々々
 瘦氣白虎禮儀之方更無逆賊之行君皇修義人怨自解廻政權儀物
 情相似定知此山者古仙修行之跡衆妙吉祥之砌也云々

縁起奥書云

奉行

去年七月廿七下請寺并長谷寺

宜旨

從五位下行左大史兼春宮大属全生忌寸望村

遣唐副使從五位上守右少弁兼行式部少卿父章博士讃岐介紀朝臣長谷雄

中納言兼左近衛大將從二位行春宮大夫藤原朝下時平

執筆遣唐大使中納言從三位兼行左大弁春宮大夫式部大補侍從菅原朝下道真



信通真病長谷の
 観音の利益あるを
 平愈に
 九十九間
 同廊と
 建立せし

安養院

今廢其址一行に上人の居住の地あり

行に上人八皇七代後冷泉院の御宇の人あり善隆中納言の李子一々惠心僧都の孫弟子なり永承七年の秋の頃當山の觀音に參籠して祈て曰我々堅固の菩提心と云ふやうに退轉せざる修行の方法を尋ねて解脫の門に入つてせんといふに七日満ちて夜の夢に觀音つゝのてらに此のころ六功德成就のまじり安養有縁の地なりといひて此山に住て我本師阿陀佛と念へば淨土成願決定と西方に往生すといふ上人由り覺て故郷に歸らば長谷寺に位して手づから花をつゝ開けんとて觀音に奉仕し弥陀をとりて念とて勸進聖とありて長谷寺靈驗建立の次第を録して仙洞御所に奏し奉るに白河法皇御願にて十回四面の御堂とほくり一院と建立し上人と住せしめり我期する所ありとて安養院と号し白河鳥羽二代の御幸も此院家を御所とせしめ生涯山と出でしに念佛の功積り行年八十九歳一々保安元年九月十五日辰の刻に高聲念佛して淨土に往生し一時雲軒たふさびと異香室に薫りて靈瑞ありとて常の人官位奉祿除病延命とてみそ祈るべきに往生の地といふ事佛心と吐くといふの人の高聲念佛不信者といふ人も今世の極信心者といふも貴きとて冥應集に見えり

續日本後紀曰美和十四年勅大和國城上郡長谷山寺元來

靈驗之蘭若也冥付所由綸為定額永以官長令捨投也

二代實錄曰貞觀十八年律師法橋上人位長朗申牒備大和

國長谷山寺是長朗先祖川原寺修行法師位道明寶龜年

中肇其同類奉為國家所建立也靈像殊驗遐迩仰止清每

年安居令居住僧等講演寂勝仁王西部經誓護朝廷其布

施供粮用寺家物太政官處分依請

詠哥

幾度も来るゝの海に抱きしめしるに谷川

歌意此寺に度よりても實殊勝なる靈地なり初めたる心地せし海といふけ也長谷寺六道も達し山も高く迴廊あり長き長途とめづり一身して六退屈し中かゝりて參るも思ふべきに余はかくて觀世音を拜し奉れ有る尊くありとも又も参りて思ふ所の生むるいかに觀音慈悲悲ふくありと双ひる靈場あり故なりたると我心は好むるに常にまじりつも初心地として厭わぬいに擬えたる初瀬寺に詠あり彼永縁僧都勅より初声の郭公といふ題に

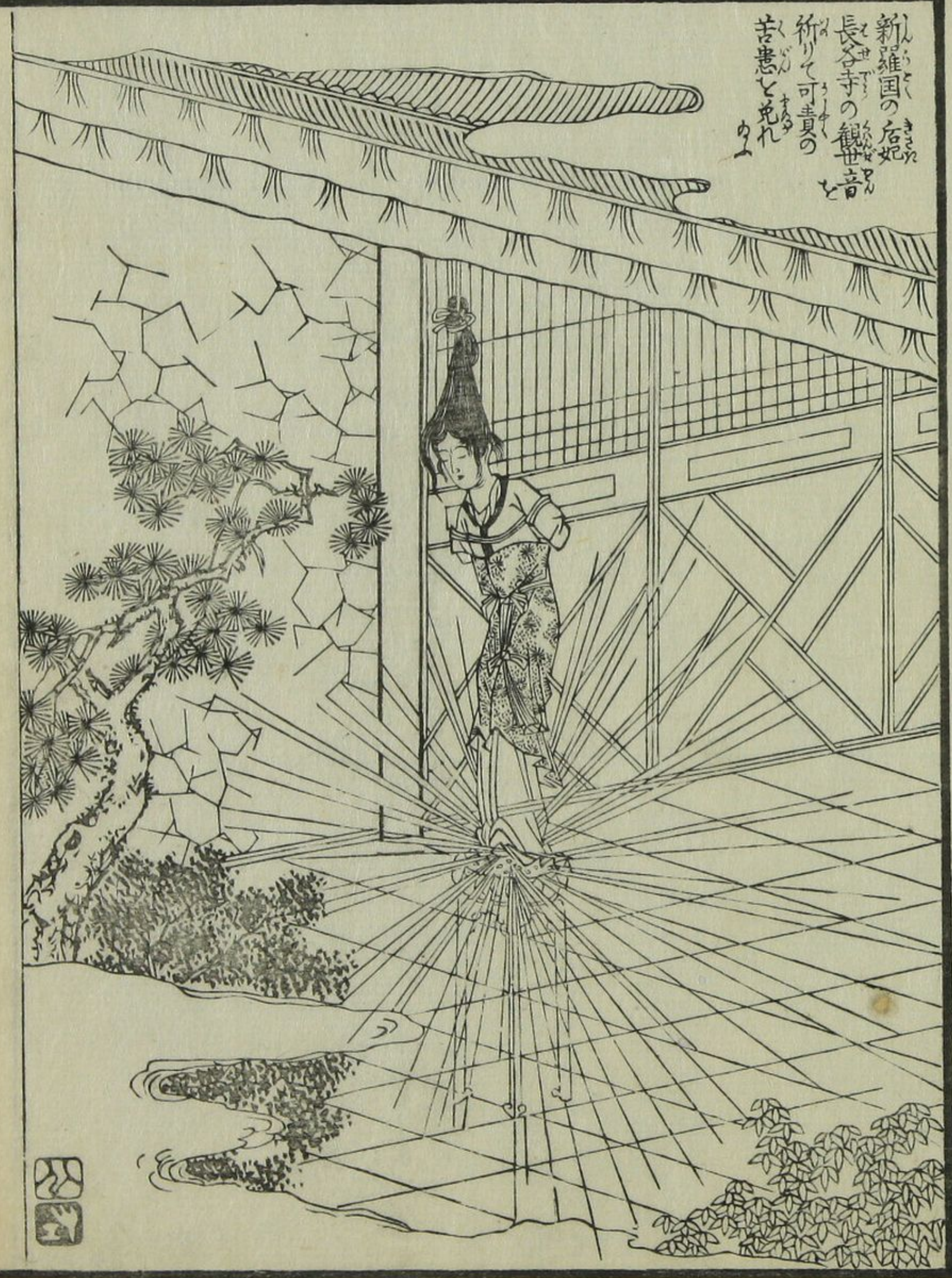
はるびと移るゝあれ時多し川も初まの心地こそすけ

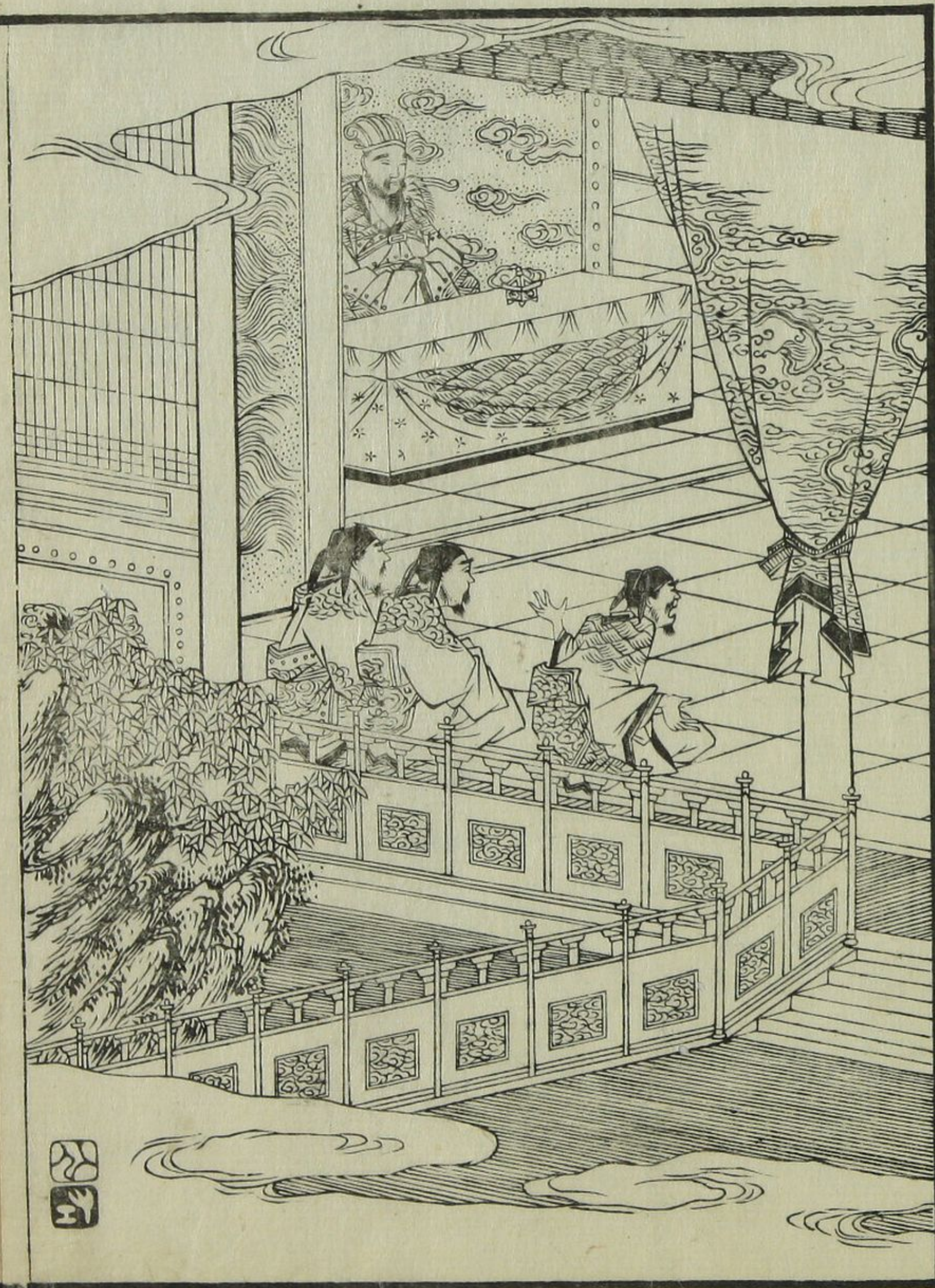
詠のいへ帝歡感のりより初音の僧正と宣命ありとてや此意にあちど下の句の山も誓ひも深き谷川に普門品に弘誓深如海と説のいへびく山觀音の慈悲なり弘誓の願の深き海のいへに同ト惣とて菩薩の四弘

誓願の中に衆生無辺誓願度と言ふ一切衆生を度盡さんとの誓願あり弘誓言即
 四弘の願行なり行に劫波経く時長く多佛に値ふ浄願を發すとの四弘の則惣願
 なり諸佛に又別願あり弥陀に四十八願なり薬師に十二願又釈迦に五百の大願有
 等あり今此觀音も別て我名號唱る衆生六淨土に引導するの深き誓ひあり
 是こそ思ひ合はる

○新羅國昭明王の后故あつて帝の御怒をうけふひ繩を髪とてらき高き所へ釣され
 足地上より二丈も上にあつてあぢくもあぢくも苦しみたゞて誰に助けを乞ふものありしを
 せんくあぢくもあぢくも心中にありやうはるる此國より東にゆく日本より一國ありて
 其國に長谷の觀音ありて佛現たりて善薩の御慈悲のやと此國すて聞て量りて
 たりとて奉つてあぢくも助けたまはるる人々も同てふさふさ念入るる人々も奇異なり
 うか忽然と金の擲足の下にあつて出るる后はるるこれ成るる人々も奇異なり
 むかし人の目には見えぬ見ざるも終るるそのつとてゆゑこれ後日頃とてこの
 重宝とて人々の多く使へる日本におくる長谷寺の觀音に献て人々の中にも大
 なる鈴とて金の簾今にあつてその觀音成杯なりとてこれ他國の人々もあつて蒙らる
 る人々もあつてむむ
 宇治拾遺に見る
 されば謡曲にも足曳の大和路や唐土までも聞かむ初願の寺に詣てつと風なり

新羅國の后
 長谷寺の觀音
 祈りて可貴の
 苦患と死れ
 る





吉備大臣野馬
臺の詩と
續む



聖武天皇の朝、吉備大臣遣唐使
奉て唐土に渡り、その彼國より
野馬臺の詩の綴り分るる百
二十字の文とあり、續むる吉備
公の續る能く、心の中に
長谷寺の觀音と念の、奇異や
續上、興下して其文の呪を糸で
教ふ、夫に龍ひ、みづの、國王
の、教の群臣と来て、恐れ、
あれ、観自在、地、神、利益
靈驗の有りと、傳へ、尊く



貧女觀音の如
如意宝珠を授る

仙源

入皇十七代之條院の御宇山城國木津とて所に弥治兵衛とて者なり族姓のやうに
 原盛の武士とて生質負實深信ありまつれどもある前世の宿業や浪人となりて
 身まづ萬端のうらに任せて困窮の日を送る程に長谷寺の觀音に祈願して福分を
 さぶちのて百日の廟堂内にありて念ふは或日寺僧の物語をきいて當寺の鐘の音の
 けいあされ鑄直にた施主もあらうといひて弥治兵衛あまを聞て多き眼坊といふ僧に
 逢ひていひやう我觀音へ祈願するけい事ありてかくありといふが若も大願ありや
 某のて鑄もて寄附奉らんといふる寺僧これをきいてさういふかき大願ありや
 その身一個さういふ寄進ありて可なりといふ生まうといふの事いふて未來の事
 といふがと微笑いふて是より寺僧は弥治兵衛成異名とて木津の未來男といふる弥治兵衛
 その故にあらざれば不審ありといふ寺僧に對してそのいひをきいて此のいふに弥治兵衛
 太く歎息しつゝ觀音といふる既ち百日満ちて夜觀音夢中につづりて明日あんな在る寺に
 至るもあんな近江國の大名に出會へといふは弥治兵衛の縁ありといふて縁ありといふて
 ありといふは弥治兵衛あんな明る成ありといふ山下といふの場所のいふる時よりや近江
 國の守護職たる藤原惟憲といふる武士長き系統ありて在京寺のいふるて幕引めくら
 破子あんと用ひといふる弥治兵衛といふる殿ありて便りありて對してつづつといふる
 家來の人といふる觀音の御利益やあつて事惟憲に達せといふるあつて對面を免され
 とも斯く弥治兵衛八卿前まで我身のいふの始終に觀音の御つげの事落しやく言ふる
 惟憲も觀音の靈告となつといふ且弥治兵衛が人品やいふる真實面にいふる未だつ
 一ちりあられ即座にいふといふ主従の御益を下さといふる本國へ運られ弥治
 兵衛生質深信といふ忠義成りといふ仕よりいふ漸に出世殿のいふるいふ

終に衆奉助負と名を更ふ近に國の代官職をあらん者弥治兵衛ハナシく觀音の御
 慈恵成りて身を養ふて下をばさるる百姓成撫育その身ハ兼食
 兼服とて儉約成りて多くの金銀をたてしあまはるるのくろくは言
 ひ長谷寺のくろくは鑄あてさるるあまはるるのくろくは言
 やう大和國長谷寺のくろくは觀音にあつて律法寺中にゆさへはくろくの再建乃を
 あつて披露とてその支度にかゝ大和國の鑄物師とていつかより成鑄とて
 その入用おびとて殊に近郷近在より群衆の畫とていつかより成鑄とて
 寛仁二年三月十八日に百僧と請て寺内寺外のくろくは觀音の御利生
 鐘銘も正六位下兼近江守助負と書け施主山城國住木津里末来男と書け
 多は坊中大いなるあまはるるのくろくは言
 あつていつかより成鑄とていつかより成鑄とていつかより成鑄とて
 鐘觀音の御誓とていつかより成鑄とていつかより成鑄とていつかより成鑄とて
 一統のくろくは言
 か言せとていつかより成鑄とていつかより成鑄とていつかより成鑄とて
 じきつやとていつかより成鑄とていつかより成鑄とていつかより成鑄とて
 けこんとていつかより成鑄とていつかより成鑄とていつかより成鑄とて
 ちやとていつかより成鑄とていつかより成鑄とていつかより成鑄とて
 未来のくろくは言
 長谷寺靈驗記に委とていつかより成鑄とていつかより成鑄とていつかより成鑄とて

觀音の御利生
 除次兵衛立身
 長谷寺の釣鐘
 寄附



あゝうそ、夢ぢやと云ひうちものともうにるあどかきへ月りのさうとふり下て
そうよりあるあど笑せりといふやと問はれるがなりやく押りひちるおふーあまな
けるをえてめゆせんといふほどで只今代々の縁あづかることいふ程の田や米あども代
てんやと云られぬく縁よりハ赤一室むらりと押りひく縁や縁あどもを用ふべきま
己縁もれ田むらへ何うこそせんずるといひたす入まざるの御用ひぐへんを傳こそ
あてごよあといふ主人はけるにあつてあらうと我あどて只ありひはるさあありとてけを
の近き田三所編みー米あどさうせてやぐてけお成つてあて己め余りて喰うやを
たふさし附かへー地させさるやとてさういふ人さうして居の之め又余とてサも
ありあぶねく我あうておたす子もいづくねなわする人もとくらんと云ひて稍て他
にわりなれば家に入居て地させさる米揃あどおとそで只鴨やうあまさと合起つるれば
そのやりある下子あどあましく使われあどてあつて居つるにたり二月むらりのこと
かうけまばそのゆゑある田織むらひ人は假せませしか我ほくらとある人の假り
たるも能あまされど我つらつたるハたとの介に能裏りあれば揃多く芥おきてまじり
おと女風の吹つくるまじりに植つきとて莫トも福人としてありはあふ家の主人も
終はるもせびあつにたまはるその家も我りのところを縁あどいできて地の介は兼々
うりあふ

○尚此余靈驗の説結つて有とて事も事一げんが畧之

藤井坊

坊ふく 今いま 慶ぎょう 寺てい 永えい 亨こう の 項こう 南なん 都と 成せい 就じゅう 院えん 法はふ 橋きやう 清せい 賢けん も あひしき、 七日にち 未み 差さ 篋けつ

藤井坊ふく 寺てい 法はふ 樂らく せし 中ちゆう 二

夕ゆふ 何なに めしきや ゆづきき 下しも あも 出で て 落おち る 寺てい の 山やま 々々 然しか

正徹しやうてつ

西
八ノ五十二

觀世音の利益
藁心一筋より
富貴の身とち



泊瀬川

水源二流あり一は金平山より流る一は山辺郡並松池より流る本郡小夫笠村を經て和村より二流相合一初瀬出雲黒崎慈恩寺金屋と輪豊並にすきと紅堤にりり城下郡に入洞林林葉云々の川より瀬川よりより長谷寺より瀬でゆるい渡るものなり

同

同

同

同

同

紅葉宮

薄塩草と云是より瀬あり初瀬海よりあり海人の瑞相ありて木の葉に宮に初よりて今も侍る觀音のまありこれ二十卷の神社の宮のまありと云

鷺山

在所未詳澄月寺抗と初瀬より薄塩草と大和國と有雪井ハ若乃ろろもくそかろやいの當流や海

鍋倉山

泊瀬の山の中に入り古河野辺の東岸上の方鍋倉の神社あり地名を鍋倉垣内と云

鍋倉神社

古河野辺の東岸山の半腹にあり今牛頭天皇より

家隆郷々塔

鍋倉の社の前より十二重の石の塔

玉葛舊跡

鍋倉神社の南の階の半の尾の麓あり此處に古き五倫の石塔あり是と其あり

喜山天神聖廟

一名二燈の嵩より人觀音堂の東の山と雨山の間に泊瀬川の流あり

本社

天満大自在天神 撰社二座 左右に列

鷺形石

本社の前の傍に有 鷺形石の傍に有本尊孫陀佛股體觀世音

當社の御鎮座

往昔人皇三十一代朱雀院の御宇初瀬里に神殿大夫武藤呂

一生不犯酒肉五辛

と断り當寺に住して難行と宗に佛道と信じて俗人

りる天慶九年九月十八日

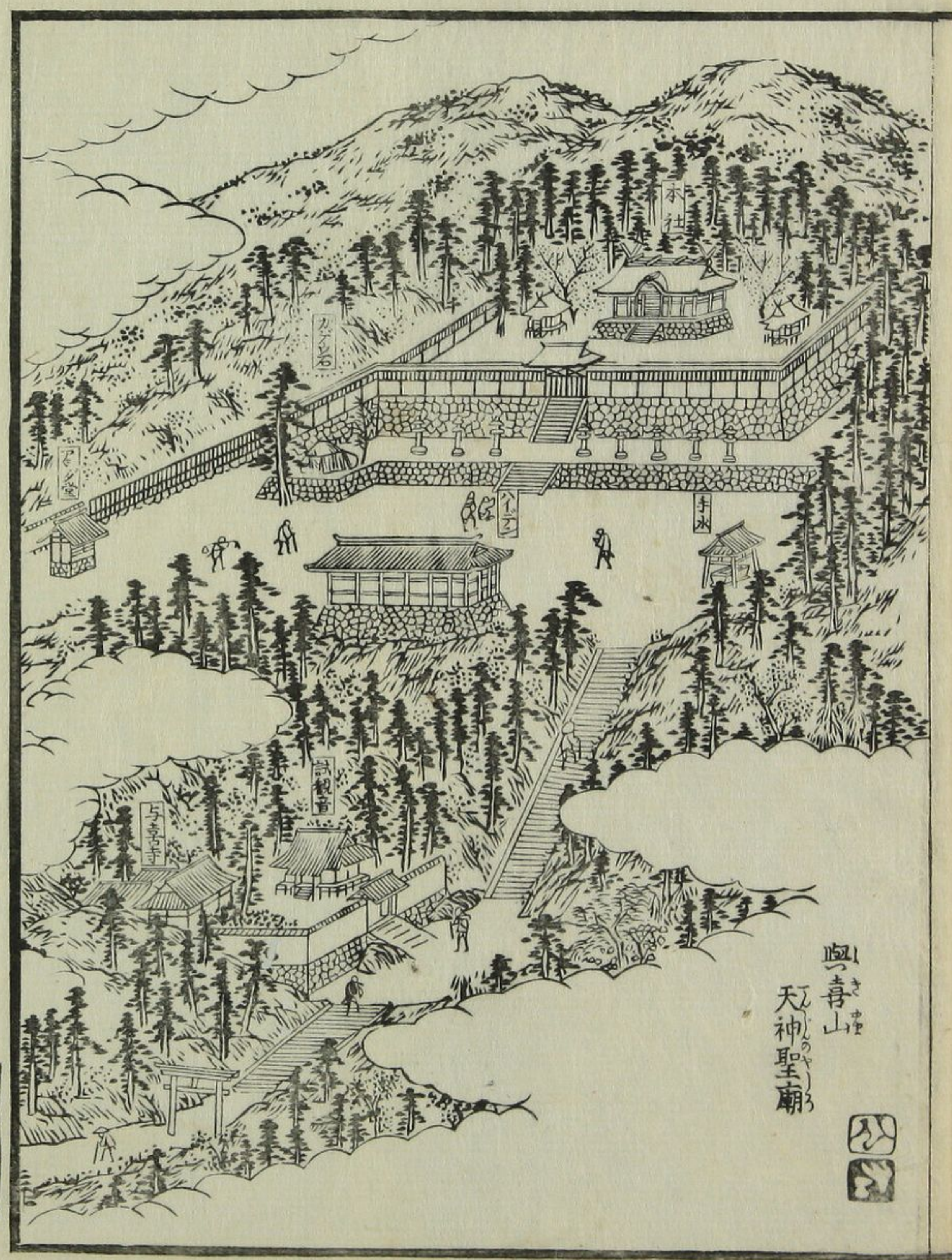
武藤呂觀音堂に夙夜日睡る小鳥帽子袴衣著

たる老翁勿念然と頭を我は

是大威驗の神あり此山に住して大聖を值遇せんと思ふと仰

ら逢ふ夢に覺り其月の廿日

紅日西傾と寂莫るる泊瀬川の下武藤呂が家の



前二十歳より一の客俗石上ノ堅一居一是則ち夢見人なり武蔵
怪一物も取来りて奉りて人々大略の招坂を登りてのり水路をバ
登りてのり武蔵麻呂通明上人の廟前より追付神酒とらん勸めり斯て御堂一結
てのり一稍きり念誦のり夜半のあけ天より雲降りて客俗を覆り
遂に雲晴後老翁我は是右大臣正二位天満天神菅原の某なり此山に居て
しめて大聖に値遇しと熱の苦しと免んと思ふ瀧藏権現答て曰く此昔
一此山の地主として初瀬の川上ニ居り此地へ佛は相應の地鎮護國家の砌
とく化度利生の瑞相金剛不動の寶座あり今より君より奉り永くこの山に
地主ありとて一本来此地へ因曼陀羅峯とて一此所に侍るなりとて
大木の根ありかの所へ住しとて一仰りて天満天神即ち雲に乗
俄に雷神に現れ松のりて至りて人々瀧藏権現の言断感修善與喜地なり
との仰り與喜山天神とあづけ其なりとて與喜里と呼び此二神の御扱
結成武蔵麻呂とのり聞とて傳り是洛陽北野天満大自在天神とて御坐

わり初め二年ハ神祠もあつて一松の本成りて社とあつてかゝりて
神祠なりて天曆二年七月武蔵麻呂寶殿を建つ祠を奉り 三國傳通記
當社例祭ハ九月廿日て郷中の武神の祭式ハ初山に影向あり松と表し神聖は御
奉りて里人四十九日に御遷りて夜丑の刻御山より神聖とて一長谷の町の東側切石の
上ニ置奉る坊中出動して管絃あり此所に甘酒と供へ舞ふとて此所の時より夜五ツ時迄まで
二王門の前ニ置奉り夜に入て能く狂言五番とて一町中より御遷りて大鼓とて一神聖とて
夜丑の刻より一還り奉り又此日の登郷中より甲冑とて馬とて一歩を武蔵又陣
に胸丸の具足とて一雜兵とて鉄炮の行列とて一初めは男女の破魔弓とて一肩より一木大勢御内より
あつて町中數十人の登郷中とて一其形勢美しとて一見事あり此日ハ近郷より一高僧人
あつて一寺に参りて一聞
四蹟幽考曰祭礼の儀式ハ先大何の前ニあり奉る則ち今この惣門前より是武蔵麻呂の家の前より一松
大路の四辻より一居奉る是金橋礼と喜村ありとて一垢離より一所より通明上人の廟の前より一御
成奉る今この二王門の内より一是御酒とて一奉りて一祈あれとて一夫より一假社に置奉りて一修院の
御宇勅額より一藤原景衡より一記し一仁王堂とて一立て天神影向の跡とあり一招坂の道と改め
直道とて一今の登り廊ありとて一三國傳通記
天神御腰とて一けしとて一石ハ長谷の町の東側の民屋にあつて通明上人の墳又天神に云ひ奉
り石あり二王門の内ニ今も有る
按今この長谷の町の東にあり神聖と置奉る石ハ則ち右より一古跡ありとて
笠山 初瀬より一凡五十丁北より一西に参りて山形の多しとて一うて名ハ其野と朝茅原とて一
薄塩草曰笠山大和国ト云々
萬葉 雨零者時蓋跡念者笠乃山人雨莫令蓋零者漬跡裳 石上武蔵朝臣
鷲峯山竹林寺 同笠村にあり俗に笠の荒神とて一
大臣不比等の創建ありと云

祭神三座

土祖神

澳津彦命

澳津姬命

舊事紀曰太神天知流美豆姬と妻と生る所子澳津彦澳津姬此二神ハ

往昔役行者行ひ居りて靈山とて善無畏之藏末朝の時天竺震旦の中

路とて天降る事天人所造の笠と將來りて此山につくせのじより

笠山の名あり此笠靈寶とて今もつるの荒神ハ良辨僧正系龜の

とて荒神現形しつゝ僧正小坂に因せり其後弘法大師彼國像と換て

荒神と刻みゆひしより永く此寺に傳はりて舊蹟幽考

泊瀬小野

初瀬の里の西ありて云人皇三十二代雄略天皇此地に遊ばり山野のけきと觀覽

日本紀曰大泊瀬幼武天皇雄略六年春二月壬子朔乙卯天皇

遊乎泊瀬小野觀山野之體勢慨然興感歌曰舉暮利能

播都制能野磨播伊麻抱智能與慮斯企野磨和斯里底能

與慮斯企夜磨能據暮利矩能播都制能夜麻播阿野餘于

羅虞波斯阿野餘于羅虞波斯於是名小野回道小野云云

文祢麻呂忌寸之墓

宇陀郡八滝村より此地ハ初瀬より凡三里巳午の方より然れハ初

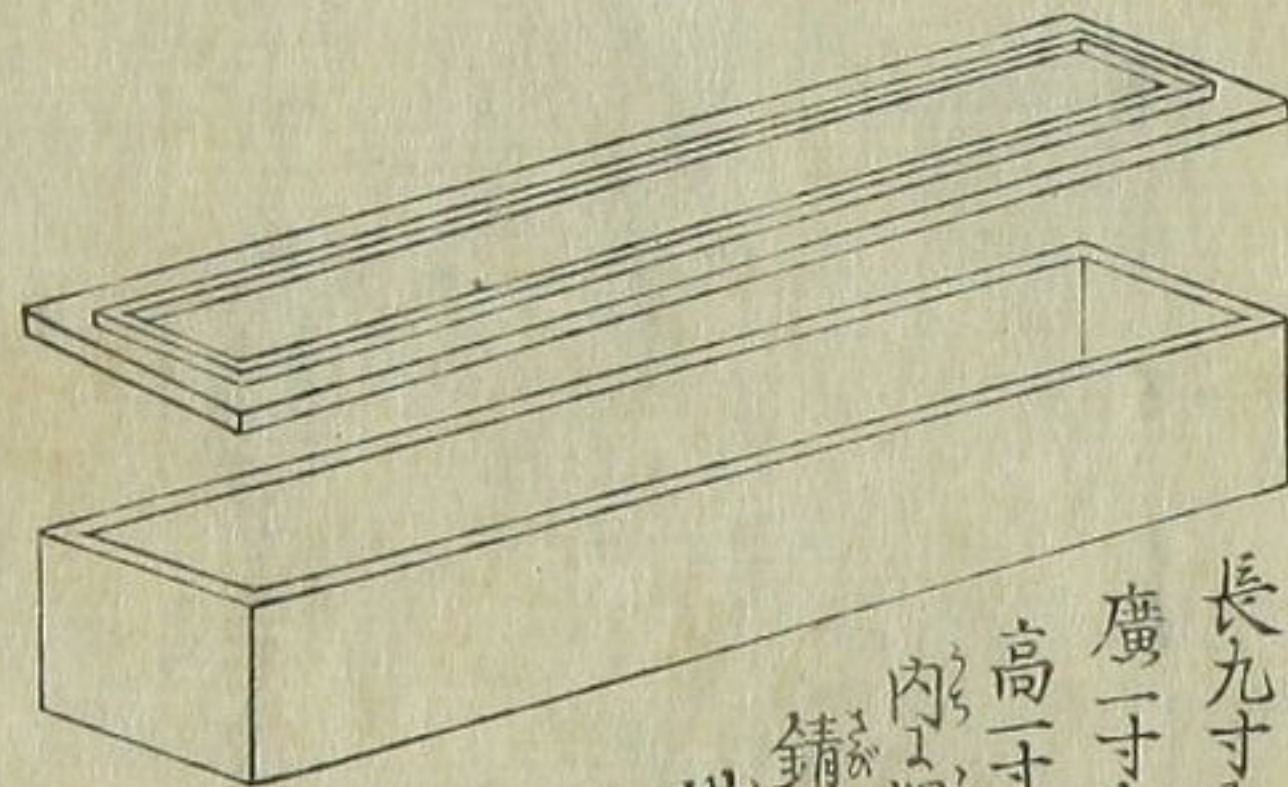
天保二年辛卯九月廿九日八滝村の米山より所の山畑より農夫より

銅器を掘出せり是より文祢の墓ありと考へ知る其器物を左に記

鑄銅 重五百匁

鑄銅鍍金

重一貫七百八十匁



長九寸五分

廣一寸九分

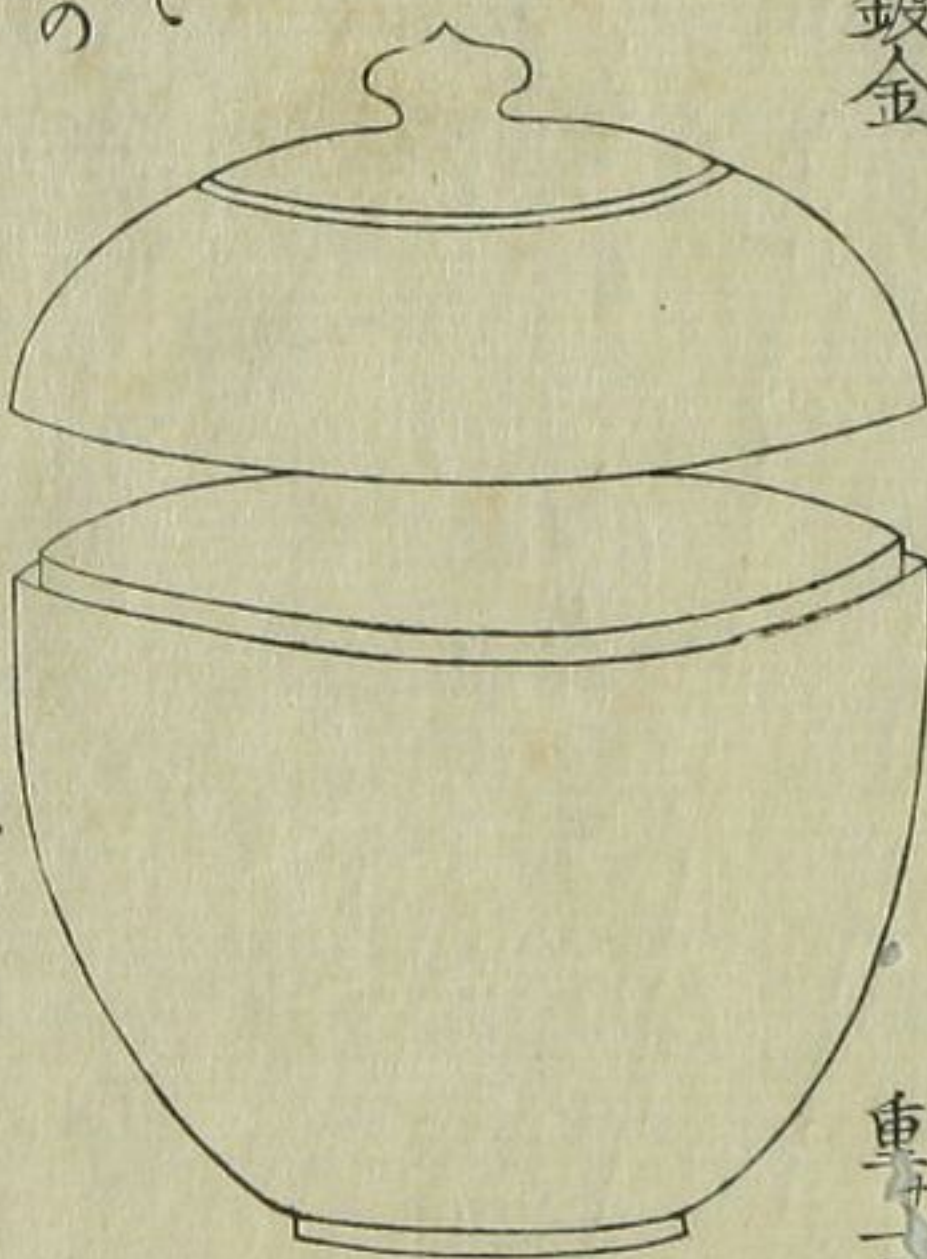
高一寸五分

内ハ牌あり

錆色すて

紺と緑の

群衆あり



高九寸

口七寸五分

内ハ壺と板あり

外ハ炭を以て

玻璃

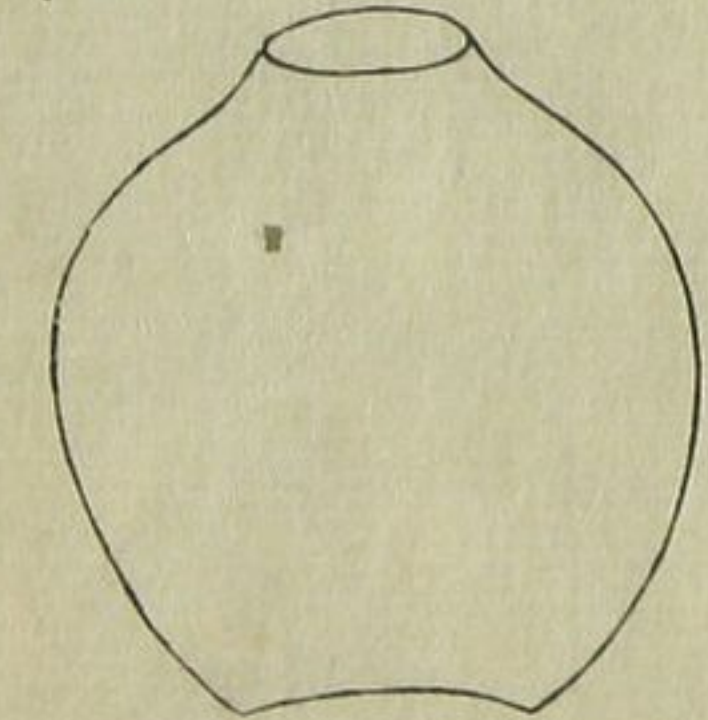
水晶の類と

俗に云

高五寸五分

口一寸六分

此内ハ水ありて掘出りて後破れてハ



鑄銅鐫字 長八寸五分 廣一寸四分

壬申年將軍左衛士府督正四位上支祿麻呂忌寸慶雲四年歲次丁未九月廿一日卒

文氏墓誌考實 穗井田忠友著

書紀天武天皇元年壬申六月甲申發途入東國。事急不待駕而行之。允從者皇后皇子已下書首根麻呂之類二十有餘人。七月辛卯遣書首根麻呂等率數萬衆自不破出直入近江。續紀文武天皇大寶元年辛丑七月壬辰壬申年功臣隨功第賜食封入勅先朝論功行封特賜村國小依百二十戶。書首根麻呂等各一百戶和介部君手等各八十戶凡十五人。賞雖各異而同居中第。慶雲四年丁未冬十月戊子從四位下父忌寸祢麻呂卒遣使宣詔贈正四位上并賜絕布以壬申年功也。

按應神天皇紀十六年二月百濟國貢博士王仁條曰王仁者是書首等之始祖也。古事記作文首古語拾遺作何内文首併同。其裔雄略天皇紀九年七月有河内國古市郡人書首加龍。齋明天皇紀二年九月有遣高麗使中判官書首國名。次見壬申之事。後至十二

磯城嶋高圓山

初瀬の南西龍谷村より赤尾山の東にあたり

新古今

あまのこゑや高圓山は秋風よりふりかへりてありと云ふは

堀川院

續後撰

あまのこゑや高圓山は秋風よりふりかへりてありと云ふは

續人不和

○初瀬より第九番南圓堂より八再び追分慈恩寺村に庚子二輪柳本丹波市標本帶解ホと経々奈良より行程凡七里余龍田法隆寺より西の京より九番にハミ行程十里の余り委々次の表に著し

編輯

攝都

鷄鳴舍曉鐘成



畫圖

松川 半山 西
浦川 公左 公國

西國三拾三所名所圖會二編

曉鐘成編輯

嗣出

西海道名所圖會

海路之部

七冊

同

近刻



西八十六

嘉永六年

癸丑三月

江戸

京都
大坂

日本橋通南壹丁目

須原屋 茂兵衛

同二丁目

山城屋 佐兵衛

芝神明前

岡田屋 嘉七

三條通御幸丁角

吉野屋 仁兵衛

心掛橋南久宝寺町

鋤屋 嘉兵衛

金田町

象牙屋 治郎兵衛

傳馬町

敦賀屋 彦七

心齋橋通北久宝寺町

河内屋 源七郎

同唐物町

河内屋 太助

同南久太郎町

河内屋 又一郎

同博勞町角

河内屋 政七

